国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和39年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001192

昭和39年度

国立国語研究所年報

—16—

国立国語研究所

1965

はじめに

本書は，昭和39年度における国立国語研究所の研究および事業について述べたものである。なお，39年度においては，研究所として特筆すべきことが二つあった。一つは，書庫及び閲覧室の新営が行われたことであって，研究所もようやく本格的な図書館を持つようになった。もう一つは，来る40年度に電子計算機を導入することの出来る予算がついたことである。

39年度内に刊行したものは次の通りである。

小学生の言語能力の発達　（報告26）

共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—（報告27）

類義語の研究　（報告28）

国語年鑑（昭和39年版）

「小学生の言語能力の発達」は明治図書株式会社から，国語年鑑は秀英出版から刊行した。さらに，昭和38年12月は，研究所の創立十五周年に当るので，その事業として「ことばの研究第２集」を計画し，本年度，秀英出版から刊行した。

昭和40年10月

国立国語研究所長

岩　淵　悦　太　郎

目　　次

刊行のことば
昭和39年度の調査研究のあらまし…… 1
話しことばに関する調査研究
　話しことばの文法の調査研究…… 4
書きことばに関する調査研究
　動詞・形容詞等の意味用法の記述的研究…… 9
　大量語彙調査機械化のための準備的研究……16
地方の言語に関する調査研究
　日本言語地図作成のための調査……20
　各地方言の共通語との対照的研究……30
国語教育に関する調査研究
　中学校生徒の言語能力の発達に関する研究……32
言語の効果に関する調査研究
　言語表現における場面の効果の研究……47
　対人的言語行動の研究……49
国語の歴史的発達に関する調査研究
　明治時代語の調査研究……60
特殊問題に関する調査研究
　現代敬語の調査研究……75
　現代語における漢字ならびに用字法に関する調査研究……81
　国民各層の言語生活の実態調査（A）……88
　　〃　　（B）……89
国語関係文献の調査……91
図書の収集と整理……97
庶　務　報　告…… 107

昭和39年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目は，次の通りである。

(1) 話しことばの文法の調査研究（継続）

(2) 動詞・形容詞等の意味用法の記述的研究

(3) 大量語彙調査機械化のための準備的研究

(4) 日本言語地図作成のための調査（継続）

(5) 各地方言の共通語との対照的研究（継続）

(6) 中学校生徒の言語能力の発達に関する研究（継続）

(7) 言語の表現機能と伝達効果の研究（継続）

(8) 明治時代語の調査研究（継続）

(9) 言語生活史資料に関する調査研究

(10) 敬語に関する調査研究

(11) 現代語における漢字ならびに用字法に関する調査研究（継続）

(12) 国語および国語問題に関する資料・情報に関する調査研究（継続）

(1) 「話しことばの文法の調査研究」は，話しことば研究室が担当し，前年度にひきつづき，シナリオを資料としての語順の研究，東京および一型アクセント地域の話しことばを資料としてのイントネーション，およびポーズの研究を行なった。

(2) 「動詞・形容詞等の意味・用法の記述的研究」は，書きことば研究室が担当して本年度からとりかかった。現代の文学作品について，動詞・形容詞の用例を採集し，語彙調査ですでに得られている用例に加えて，その意味・用法を詳しく記述し，また付帯的に動詞・形容詞以外でも注目すべき用語の採集を行なった。

(3) 「大量語彙調査機械化のための準備的研究」は，前年度にひきつづき書きことば研究室が担当し，電子計算機導入のために，その利用法の研究を進めるとともに，諸機種の性質や能力について検討し，また電子計算機に連結して用いられるべき漢字テレプリンタについて研究した。

(4) 「日本言語地図作成のための調査」は，地方言語研究室が8年間ひきつづいて行なってきた調査で，本年度はその計画の最終年度として，全国2400地点における臨地調査を完了し，次年度からその出版にとりかかることになった。

(5) 「各地方言の共通語との対照的研究」は，地方言語研究室が担当し，第2年度として，京都市方言について10人の対話を録音し，分析用テキストを作成した。また，鹿児島市で文法に関する質問調査を行なった。

(6) 「中学校生徒の言語能力の発達に関する研究」は，国語教育研究室が担当し，前年度の準備をうけて，本年度から，中学生の漢字習得および言語能力構造に関して，また中学校の言語教育教材について行なうこととなり，公立中学校数校の協力を得て，調査，テスト，作文収集などを実施した。

(7) 「言語の表現機能と伝達効果の研究」は，前年度にひきつづき言語効果研究室の担当であるが，本年度は，「言語表現における場面の効果の研究」として，主語の有無と場面との関連について文学作品から材料カードを採集分類し，また「対人的言語行動の研究」として，小学校高学年生と中学生・高校生の，家庭内と学校のクラス内でのコミュニケーションの質と量について質問調査を行なった。

(8) 「明治時代語の調査研究」は，近代語研究室が担当し，明治初期の文献について，用語の表記と漢字の用法を調査し，語彙用例記載カードの作成をつづけ，助詞・助動詞の調査のため用例収集の準備をした。また，明治初年生まれの古老の談話を保存資料とするため，山口県下で録音を行なった。

(9) 「言語生活史資料に関する調査研究」は，古代語研究室開設準備室において，上代文献に現われる言語生活に関連する事項の摘録・整理を試みた。なお，同室で数種の古辞書を写真複製した。

(10) 「現代敬語の調査研究」は，第一資料研究室と第二資料研究室（飯豊）とが共同して，敬語の問題点に関する文献調査を行なうとともに，年齢，性，職業，教養等の条件が敬語の意識にどう関係するかについて，準備的な質問調査を，奈良市，高松市，大田原市で実施した。

(11) 「現代における漢字ならびに用字法に関する調査研究」は，ひきつづい

て第三資料研究室が担当し，表記のゆれ，とくに送りがなの問題点の分析にかかり，また，漢字とかなの使い分けの問題点について材料を準備した。

(12) 「国語および国語問題に関する資料・情報に関する調査研究」は，第二資料研究室がひきつづいて文献等の調査を行ない，『国語年鑑』の資料として整理した。

なお，以上の項目のほか，前々年度および前年度に行なわれた「国民各層の言語生活の実態調査(A)(B)について，それぞれ集計整理・記述がつづけられた。

また，「現代語誌記述のための基礎的研究」の題で，文部省科学研究費（総合研究，代表者林大）の交付を受けた。これについては，本年度は主として用例採集を行ない，大量の用例カードを作製，整理することができた。

本年度内に刊行した「国立国語研究所報告」は，次の3種である。

報告26　小学生の言語能力の発達（明治図書刊）

報告27　類義語の研究

報告28　共通語化の過程　——北海道における親子三代の調査——

本年度の研究組織は，次の通りである。

第一研究部	（部長）林　大				
	話しことば研究室	（室長）大石初太郎	宮地　裕	鈴木重幸	
	書きことば研究室	（室長）見坊　豪紀	西尾寅弥	石綿敏雄	南不二男
		松本　昭	宮島達夫		
	地方言語研究室	（室長）柴田　武（9月1日転出，以後，林大が室長事務取扱）			
		野元菊雄(在英)	上村幸雄	徳川宗賢	
第二研究部	（部長）興水　実				
	国語教育研究室	（室長）芦沢　節	村石昭三	根本今朝男	
	言語効果研究室	（室長）林　四郎	高橋太郎	渡辺友左	
第三研究部	（部長）山田　巌				
	近代語研究室	（室長）永野　賢	進藤咲子		
	古代語研究室 開設準備室	（主任）山田　巌	広浜文雄		
第四研究部	（部長）松尾　拾				
	第一資料研究室	（室長）松尾　拾	田中章夫		
	第二資料研究室	（室長）飯豊　毅一	大久保愛		
	第三資料研究室	（室長）斎賀　秀夫	土屋信一（9月1日就任）		

話しことばの文法の調査研究

A　目的・意義

現代の，主として共通語の話しことばについて，文法の調査研究を行おうとするものである。

文法的事実に関して，現代日本語の話しことばと書きことばとの上にかなりの相違があることは，すでに見通されているところである。したがって，話しことば・書きことばの両面について文法研究が進められる必要がある。これまでの日本語の文法研究には，その点ふじゅうぶんなところがあった。ことに，話しことばについての文法研究の面が，いちじるしくおくれているといえる。現状において，話しことばについての文法研究は，日本語の文法研究の上の重要な課題である。また，それは，教育や国語改善などの，実践の問題に対しても，寄与するところのあるものと期待される。

B　担　当　者

この仕事に当たる話しことば研究室における本年度の分担は，次のとおりであった。

語　順 —— 鈴木　重幸

イントネーション —— 宮地　裕

ポーズ —— 大石初太郎

なお，補助研究員吉村香苗・衛藤蓉子が作業を助けた。

C　これまでの作業経過

話しことばの文法研究では，その第１段階として文型の研究を行ない，すでに報告書『話しことばの文型（１）——対話資料による研究——』(1960)，『話しことばの文型（２）——独話資料による研究——』(1963) を出した。そこでは，文を表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの面から分析し，話し

ことばの文に関する文法の基礎的，概観的調査を行なった。前年度からは，改めて話しことばの文法の体系的研究を目ざし，問題点を順次取り上げて詳しく調査研究することになり，まず，シンタックスの面で語順等の研究に着手し，一方，イントネーション・ポーズ等，文法と関連すると考えられる音声面の研究にとりかかった。

語順等の研究は，映画シナリオの会話文を資料として行なうこととし，第1年度は会話文の文ごとのカード（約28,000枚）を作り，一部分，分析にとりかかった。

イントネーションの研究は，話しことばの文におけるイントネーションがいかに意味表現に参与するか，イントネーションと文法との関連はどうかを探究することを目的とし，前年度は，東京語における理論的体系的考究と，一型アクセント地帯のイントネーションの調査を行なった。

ポーズの研究は，ポーズが文の構造とどのように関連するかを見ることを目的とし，第1年度は，準備的作業として，少量の発話資料につき，ポーズに関するいくつかの分析を行ない，問題を概観した。

D　本年度の作業

1.　語順等の研究

前年度にひき続き，映画シナリオの会話文を資料とし，語順およびそれに関連するシンタックス上の問題の研究を進めた。

本年度は，次表の作品の会話文の文ごとのカード（約12,000枚）を作って，前年度作ったカード（約28,000枚）に加え，その第1次的な分析にかかり，そのほぼ3分の2を終わった。

第1次的分析とは，それぞれの文について，どんな成分あるいは句からなりたっているかを認定し，それをカードに記入し，カード周辺にパンチする作業である。成分の認定は，一応，『話しことばの文型（2）』の方式に従った。句については，それ以上の分析はせず，問題をあとに残してある。

本年度あらたに取り上げた作品は，次のとおりである。

（作　品）	（作　者）	（出　典）
女が階段を上る時	菊島　隆三	年鑑代表シナリオ集　'60年版
黒い画集	橋本　忍	〃
悪い奴ほどよく眠る	小国　英雄・久板栄二郎 黒沢　明・菊島　隆三 橋本　忍	〃
おとうと	水木　洋子	〃
秋日和	野田　高梧・小津安次郎	〃
天国と地獄	小国　英雄・菊島　隆三	〃
白と黒	久板栄二郎・黒沢　明	年鑑代表シナリオ集　'63年版
彼女と彼	羽仁　進・清水　邦夫	〃
江分利満氏の優雅な生活	井手　俊郎	〃

2.　イントネーションの研究

前年度にひきつづき，東京語による一般的考究と，一型アクセント地帯のイントネーションの調査を行なった。

（調査地点）	（被調査者）
熊本県菊池郡泗水町	菊池　正人・菊池　とか・仁部やよい
鹿児島県志布志町安楽	蔵園　時義・西　正雄・森　喜寿
静岡県安倍郡井川村	滝浪　善一・安竹　かよ・安竹　福丞・望月　関作 望月藤三郎・遠藤　さと・野沢　ふさ・松下　ふじ
福井市春山町	嶋田　栄一・嶋田　早苗
鯖江市本町	松田沢次郎・松田ちのえ

各2名の自由対話を主とし，一部3名ないし4名の座談を採録した。このうち，熊本・静岡の録音はカナモジ化し，録音と対比してイントネーションを観察した。他の資料も順次カナモジ化する予定である。ただし，全般的な基本問題，音韻あるいは音声記号化，共通語訳などの諸問題については，なお考究すべき点が多い。

以上の調査および前年度採録資料の処理に関して，次の諸氏の御助力・御協力を得た。

宮里泰夫（都城市市役所課長）　鈴木久雄（都城市五十市中学校教諭）　石坂正蔵（熊本大学教授）　秋山正次（熊本大学助教授）　北原竜起（熊本県泗水小学校長）　山口幸洋（静岡

県浜名町在住）佐藤　茂(福井大学教授）岡田正世(福井大学助教授）植田命寧(鯖江市惜陰小学校教諭）黒田憲治(愛媛県長浜町大和第一中学校教諭）

次年度においては，イントネーションの音声的実態と，その表わす意味との関連について概観整理を試みる予定だが，イントネーションの解釈としては，大略次のように考えている。

1）意図表現イントネーションとして，文の陳述を表わす文末の上昇調と下降調との別を立てる。

2）卓立表現イントネーションとして，文中（ときに文末）の強調的意味を表わす高調（まれに低調）を認める。

3）以上のほかの特殊な文音調あるいは臨時的な文音調は，別扱いとする。

以上のようにイントネーションを限定し，当面，そのうちの文末・句末あるいは連体修飾語句末などの，特定部分におけるその実現に限定して，分析記述を進めることにしている。

なお，一部については，ソナグラフ・オシログラフ（電磁・ペン書きとも）によって分析を試みた。

3. ポーズの研究

ポーズが文の構造とどのように関連するかを見るために，

1）構文上どういう位置にポーズがあらわれるか。

2）ポーズの直前はどんな音調をもつか。

の2点を主として調べることにした。2)はとくにイントネーションの研究とつながることを期待したものである。

なお，1)については，ポーズの大小の別に着目し，2)については，ポーズの大小の別，および構文上の位置に着目して整理することを計画した。

使った資料は下記のとおりである。

朗　読　2種	20分
ラジオ，ニュース　4種	25分
テレビ，ニュース　4種	35分
ラジオ，ニュース解説等　4種	40分

テレビ，ニュース解説	3種	30分
講　演	1種	10分
講　義	2種	20分
	（計）	180分

本年度は，上記の計画によるポーズおよび音調のマークづけを終わり，あわせて，関連する基本的な問題について考察を進めたが，それの整理は，ほとんど次年度にもち越すことになった。

一部の資料については，ペン書きオシログラフ・電磁オシログラフにかけて調べたが，作業の大部分は耳の聞き分けによった。

なお，ポーズの大小の弁別・分類や，ポーズの直前の音調の平ら・上がり・下がりの聞き分け，ないし解釈に関しては，作業的な困難や理論上の問題があり，さらに考究を要する。

E　今後の予定

次年度は，語順等の研究，イントネーションの研究，ポーズの研究を，それぞれ継続する。イントネーション・ポーズに関しては，いずれも，当面の作業にほぼ一応のまとめをつける予定である。

（大　石）

動詞・形容詞等の意味・用法の記述的研究

A　目的・意義

目的　現代語の動詞・形容詞の意味・用法を，言語作品のなかで実際につかわれた用例によって記述すること。

意義　これまで，現代語の意味・用法の記述（たとえば辞書における）は，主として主観的に，思いつくものを記述するという態度でされていた。このため，重要な用法でぬけているもの，あやまって一面的に規定されたものなどが少なくない。これをさけるためには，大量の用例によって，客観的な事実にもとづいて記述をすすめなければならない。この点，書きことば研究室が行なってきた語彙調査の結果つくられた用例カード（総合雑誌について23万，雑誌九十種について44万。いずれも自立語。）は，重要なものである。[注1)] しかし，本格的な記述には，これだけではまだ不十分なので，さらに大量の用例を追加する必要がある。このようにして，豊富な例からえられた結論は，将来の辞書編集の基礎となるとともに，意味・用法の記述の方法論にも寄与するであろう。

記述の対象を動詞・形容詞（形容動詞をふくむ）にかぎったのは，名詞にくらべて専門語的な要素が少なく，それだけ言語学的処理の対象として適当であると思われるためである。

記述は，用例の数に制約される。このためよく使われる単語に重点がおかれることになろうが，度数順ではなくて，同一の意味分野に属する語（たとえば資料集6「分類語彙表」に示したような）ごとにすすめる。

なお，「現代語」の範囲については，ここでは言文一致以後の言語作品のことば，というように，かなり大きく考えておく。こまかくみれば，その範囲内でも，かなりの変遷があるのは事実だが，基本的な用法では，そう大きく動いていないし，明治期の作品が今の新しいものと同様さかんに読まれているという事実もあるからである。

注　1）　書きことば研究室がこれまでに行なってきた用語・用字調査の規模等は次のと

おりである。

用語調査

	資　料	調査対象	抽出比	標本延べ語数	標本異なり語数	母集団の推定延べ語数	発　表
1	婦人雑誌	主婦之友*（25年1月～12月）（本文全体）	約1/6	14.6万	2.7万	90万	報告4
2	総合雑誌	13種（28年7月～29年6月）（本文全体）	約1/40	23万	2.3万	900万	報告12～13
3	現代雑誌一般	5部門90種（31年1月～12月）（本文全体）	約1/230	53万**	4.0万	1億6千万	報告21，25

＊別に，実用記事だけについて『婦人生活』（25年1月～12月）を同じ抽出比で調査した。標本延べ語数は5.2万，同異なり語数は1.0万，実用記事全体の推定延べ語数は33万である。参照，報告4。　**助詞・助動詞を含む。

用字調査

	資　料	調査対象	抽出比	標本延べ字数	標本異なり字数	現われなかった当用漢字字数	発表
4	婦人雑誌	1に同じ*	全標本	17.0万	3048	41	報告4
5	総合雑誌	2に同じ	全標本の1/2	11.7万	2781	73	報告19
6	現代雑誌一般	3に同じ	全標本の2/3	28.0万	3328	15	報告22

＊『婦人生活』の実用記事の場合は，標本延べ字数6.0万，同異なり字数2,000字である。

参考　婦人雑誌の調査の前に，朝日新聞の昭和25年6月分に対し全数調査を行ない，延べ24万，異なり1.5万（人名・地名を含まない）の語数を得た（資料集2『語彙調査――新聞用語の一例――』昭和27年3月）

B　担　当　者

見坊豪紀(その他について)・西尾寅弥(特に形容詞・形容動詞について)・宮島達夫(特に動詞について)が担当した。なお、研究補助員橋本圭子・高木翠・本多レイ子が作業を助けた。

C　本年度の作業

本年度は，「現代語誌記述のための基礎的研究」の題で文部省科学研究費の交付を受けた総合研究（代表者・林大）の主軸をなす部分として，大量の用例カードの作成とその一部の記述を行なった。

Ⅰ　用例採集の対象

本年度は，第１年度として，明治・大正・昭和にわたる次の27の文学作品から，動詞・形容動詞等の用例カードを作成した。結果として，16万枚余りのカードを五十音順に排列したものが得られた。

作品年代	作家名	作品名	ページ
1898	国木田独歩	武蔵野	28
1900	泉鏡花	高野聖	72
1906	伊藤左千夫	野菊の墓	54
1906	島崎藤村	※破戒	336
1907	田山花袋	蒲団	81
1907	二葉亭四迷	平凡	135
1912	森鷗外	※阿部一族	55
1913	有島武郎	※或る女(前)	233
1913	鈴木三重吉	桑の実	159
1914	夏目漱石	※こころ	285
1915	徳田秋声	あらくれ	250
1915	佐藤春夫	田園の憂鬱	115
1915	芥川竜之介	※羅生門	13
1919	菊池寛	恩讐の彼方に	35
1919	武者小路実篤	※友情	125
1921	志賀直哉	※暗夜行路(前)	263
1923	里見弴	多情仏心(前)	361
1926？	宮沢賢治	※銀河鉄道の夜	79
1926	宮本百合子	伸子(上)	198
1929	小林多喜二	※蟹工船	114
1931	永井荷風	つゆのあとさき	115
1933	谷崎潤一郎	春琴抄	77
1936	阿部知二	冬の宿	219
1937	川端康成	雪国	171
1938	堀辰雄	風立ちぬ	94
1939	太宰治	※富嶽百景	24
1952	野間宏	※真空地帯(上)	233
		(合計	3924ページ)

以上の作品は，１作家１作品の方針で，次のような方法で選択した。

(1)　岩波文庫「百冊の本」に収められている，現代日本文学をまず採る。

上の表の作品名に※をつけたものがそれ。

(2) 岩波・新潮・角川の3文庫に共通して収められている作品。（ただし，1作家について，それが2作品以上あるばあいは，分量があまり多くないもの等の条件によって，1作家1作品に絞った。）

(1)，(2)の条件にあてはまる作品は，ほかにも若干あったが，作業の可能な限度を考慮して，本年度は以上の諸作品を対象とすることにした。

Ⅱ　カード作成の方法

カードの作成は，リプリント法すなわちトーシャファックスによって文献を複製，謄写印刷し，これをカードの大きさに断つ，という方法で行なった。原版には岩波文庫本を用い，その約½ページ分ずつをカード1枚の内容として複製した。異なるカードの種類は7686となった。同じ種類のカードは各50枚作成した。採集すべき動詞または形容詞1個に対して1枚のカードをあて，その語の部分をまるくかこんで目印とした。採集した語数はカード1種類につき平均20程度である。これは文庫本1ページにつきおよそ平均40語ほどを採集したことになる。

このようにして得られたカードを五十音順に排列して，カード作成の作業をひとまず終えた。その結果得られた，語別のカード枚数は，数語を例としてあげれば次の通りである。

上げる	314	浮かぶ	119	さがす	123	まがる	52
重い	109	薄い	96	厚い	72	濃い	69

Ⅲ　意味記述の開始

カードの五十音順排列が完了したのは年度末であったが，五十音のはじめのほうはもっと早く排列ができた。その部分のカードを用いて，語の意味の記述をわずかながら開始することができた。草稿の一部分を見本として次に掲げる。

あげる　（用例数：総合雑誌 119，雑誌九十種 280，文庫本 314）

……特殊化を意味のずれの第1段階とすれば，第2段階としては，これに象徴的用法の加わるものがある。ここで象徴的用法とよぶのは，そこで直接の

べられている動作にともなう他の現象を暗示するようなものである。「あげる」という動作をその一部分として含む，より大きな動作を示している，という意味ではこれを提喩的な用法とよんでいいかもしれない。

○「御目出たう」と云って，先生が私のために杯を上げて呉れた。（こころ　88）

○然し其翌日からは母が止めるのも聞かずに，とうとう床を上げさせて仕舞った。（こころ　59）

「さかずきをあげる」というとき，かんじんなのは酒をのむことである。「床をあげる」では床をかたづけることである。これらのばあい，さかずきや床の〝上昇〟という事実はあるにちがいないが，大切なのは，その上昇に象徴され，代表されているもっと大きな動作全体である。しかし，ここで「あげる」に「(～をつかって)酒をのむ」「かたづける」などの独立の意味をみとめるべきではないだろう。なぜなら，この用法は，「さかずきを」「床を」という形，または意味的にみてこれときわめて近い「祝盃を」「ふとんを」などの形でしかみられず，「茶わんをあげる」「コップをあげる」や，（かたづける意味で）「下着をあげる」「食器をあげる」などとはいえない。つまり，これは自由なむすびつきをつくるものではなく，意味のずれは「さかずきをあげる」「床をあげる」全体についておこっているものとみるべきである。……

かるい　（用例数：総合雑誌 10，雑誌九十種 82，文庫本 174）

（前　略）

〔3 1〕　動作などの程度が小さいという意味で「軽い」が使われることがある。たいてい「軽く＋(動詞)」という連用修飾の形で用いられ，「軽く」以外の形が，この意味で用いられることは少ない。

○それと見た体操の教師は軽く銀之助の肩を叩いて（破戒　264）

○伸子は軽く頭を下げる拍子にはじめてその男の顔をはっきり見た。（伸子　12）

○葉子は又黙ったまゝ軽くうなづいた。（或る女(前)　90）

○軽く開いたまゝの唇から漏れる歯並みまでが（或る女(前)　155）

○君江は軽く瞼を閉ぢ（つゆのあとさき　87）

○葉子を見て軽く笑っていた。（或る女(前) 171）

○葉子は唇だけに軽い笑ひを浮べながら（或る女(前) 215）

○畳と壁とに拡がって寫ってゐる影法師も軽く揺(ゆら)いだ。（桑の実 51）

（後 略）

Ⅳ その他の用例の採集

上と同じ資料の範囲で，動詞・形容詞のほかに広く全品詞にわたり，また用字の面も考慮して，特色のある用例をできるだけ多く採集整理しておくことにした。これは，おのずから限度はあるが，一種の豊富な現代語用例集をなすことになる。今年度は，約10万枚の用例をカードに採集し，一部は五十音順に排列した。次にあげるのは，そのごく一部の例である。

「息せき」という語は，『大言海』に見出し「いきせく」，『大日本国語辞典』に見出し「いきせき」として登録され，用例として「いきせきする」（江戸時代の例），「いきせき走る」などがあがっている。現代語としては，「息せききる」などの慣用形で用いられるのが普通かと思われるが，このたびの採集で，上の両辞典にあるような副詞的な用例として，次の１例を得た。

○直ちにお島は，息せき家へ駈けつけて来た。そしていきなり父親の寝室(ねま)へ入って行った。（あらくれ 61）

これは，現代における古い型の残存を辞典に示すとすれば，用いることのできる例である。

「哀愁」は，従来の語彙調査で採集したカードに３例あるが，このたび８例を加えた。

○堪へ難い哀愁が其の胸に漲り渡った。（蒲団 30）

○不安と哀愁とが，時々心を曇らせた。（あらくれ 70）

○お島の心には，旅の哀愁が少しづゝ泌みひろがって来た。（あらくれ 104）

○次第に深い失望と哀愁のなかへ心が浸されて行くのを感じた。（あらくれ 250）

○私の哀愁はいつも此蟲の烈しい音と共に，心の底に泌みこむように感ぜられた。（こころ 121）

○私の哀愁は此夏歸省した以後次第に情調を變へて来た。（こころ 121）

○こもった哀愁が，發しない酒のやうに，葉子の顳顬(こめかみ)をちかちかと痛めた。（或る女(前) 61）

○その孤独は哀愁を踏み破って，野性の意力を宿していた。（雪国　70）

このように，普通の国語辞書には採用されていない語や用例を採集記録しておくことは意味があると考える。このたびは，特に複合語（複合名詞・複合動詞など）に関して多くの例を得た。次に掲げるのは，「愛嬌」という語がどのような複合語を作るかについて，加えることのできる例である。

○隅の椅子に凭れて，股火鉢をしながら何かを噛んで口を鳴らしてゐた女〔バーの女給をさす〕が二人立ち上って，愛嬌声を立ててきたが，（冬の宿　111）

○丸三の女房は，二重（ふたへ）のキョロリとした眼もとに愛嬌皺をよせ，〜輕く會釋しながら（多情仏心(前)　203）

○老婦人は，愛嬌（あいけう）よく伸子をホールに導き入れた。（伸子(上)　79）

〔冬の宿　39にも「愛嬌よく笑って」とあり〕

○いつぞやは御世話さんでした。〜」／瀧十郎は愛嬌笑ひをした。（多情仏心(前)　48）

E　今後の予定

40年度は，39年度と同様の方法で，あたらしい作品についての用例カードを作成し，一方では記述・採集もすすめる予定である。

（見　坊）

大量語彙調査機械化のための準備的研究

A　目　　的

書きことば研究室ではこれまで比較的大きな規模の語彙調査を行なってきたが，現代語彙の研究資料，国語問題解決のための基礎的な資料としては更に大きな規模の調査が要求されている。そのような大きな規模の調査は従来のような手集計の方法ではほとんど不可能なので，調査を機械化することを考える必要がある。語彙調査の機械化の方法としては電子計算機を用いるのがよいと考えられる。またデータとして漢字かなまじり文をそのままの形で取り扱うとすれば，入出力用機器として漢字テレプリンタを用いる方法が考えられる。これらの機械を導入する準備を行なうのが本年度の目的である。

B　担　当　者

書きことば研究室の石綿敏雄，南不二男，松本昭の３名がこれに当たり，研究補助員小林さち子がこの研究作業を助けた。

C　これまでの研究経過

この研究は昭和38年度から始まった。昭和38年度には，電子計算機の性質および能力についての各種の情報を集めることが主であった。(詳細については38年度年報参照)。

D　本年度の調査研究作業

本年度は国語研究所で用いる電子計算機として最も望ましい性能をもつ計算機の選定，および漢字テレプリンタの研究を行なった。

1　電子計算機の選定

国語研究所において行なう電子計算機による情報処理は，一般の会社や事業場などにおける事務計算や科学計算とは性質を異にしている面がある。それ

で，その処理方式に最も適した性能をもつ計算機を導入することを考えなければならない。このために，次のような方法をとった。

1　各社に同一の問題を依頼して計算機による処理方式を作成してもらい，これを比較する。

2　各種の計算機について，その性能を調べる。このために，各機種について，プログラムによる処理方法も習得して検討する。

1の検討の結果，大規模な調査には大きな記憶装置が必要であり，従って小型の計算機では不適当であるとの結論に達した。しかし，いわゆる大型の計算機を入れることは，費用その他の点で問題がある。そこで国産の中型機種について次の点から検討した。

1)　メーカー各社に，作品の用語総索引を作るプログラムの作成を依頼した。データとしては芥川竜之介の「蜘蛛の糸」（延べ語数1460語，異なり語数450語）を用いた。この処理過程のブロック・チャートを次のページに示す。

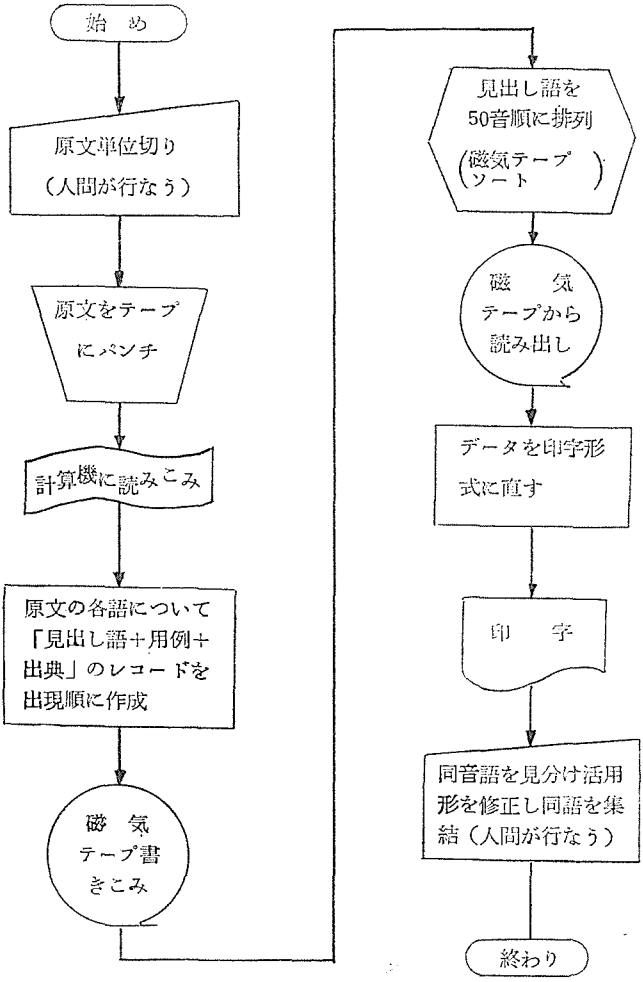
2)　各社の処理過程および実験の結果を比較検討し，あわせて計算機による言語情報処理の各種の処理方式のばあいについても比較検討した。これは次のような点である。

a　漢字テレプリンタによるデータの取り扱いが可能なこと。これは漢字テレプリンタを用いることによって，漢字かなまじり文をそのまま電子計算機で処理できるようにすることが目的である。このためには6ビット2列で1字を表わす漢字テレプリンタのビット構成が，なるべくそのままの形で計算機にはいるようになっていれば，便利である。

b　言語というデータはその性質上可変長であるから，可変長のデータの取り扱いが可能な計算機の方が便利である。（特に語彙調査のような言語情報処理のばあいはそうである。）

c　日本語を横書きするときは右からでなく，左から書くのが現代一般の習慣であることから，計算機内部での各種のデータ処理（比較，移動など）のばあい，データの左端を基点とする処理ができれば便利である。言語情報処理では比較・移動などの操作が多いので，このような点も重視した。

作品の用語総索引作成のブロック・チャート



各機種にはそれぞれ特長があるが，以上のような見方から各機種を比較した結果，HITAC 3010 が最も適当だと判断した。ことに漢字テレプリンタのデータの取り扱いについては，この機種はその実績がある。

2　漢字テレプリンタについて

国語研究所で用いる漢字テレプリンタは，それによって作ったデータが電子計算機で取り扱うことができるものでなければならない。このためには次のような点を解決する必要がある。

1　電子計算機には内部での処理の必要上いくつかのコードを別にとっておく必要があるが，そのようなコード上の制限を考えて計算機の中での処理にさしつかえがおこらないようにすること。

2　かなや記号のコード形式に特徴をもたせ，かなや記号などがコード上電子計算機の中で比較的簡単に識別できるようになっていること。

3　かなのコードが，分類や五十音順排列に便利になっていること。

4　盤面で文字が捜しやすいこと。

これらの点について研究し，漢字・かな・記号をふくめて2400個の字種を有する漢字テレプリンタの仕様を作成した。

なお今年度には，計算機による語彙調査の小実験を行なった。(→『ことばの研究』2 —石綿敏雄「電子計算機による語彙調査の一実験」)

E　今後の予定

電子計算機導入の予算が認められたので，昭和40年度には計算機を導入し，本格的な調査を行なうためのプログラムの開発を行なう。また，漢字テレプリンタ・ハンドブックの作成，調査単位の決定，語彙の計量法の研究，語彙調査資料の収集など，大規模な語彙調査の準備を行ない，昭和41年度から実施にかかる。

日本言語地図作成のための調査(最終年度)

A はじめに

北海道から沖縄まで，日本語地域の全域（37.2万km²。人口9440万—昭和35年現在—）を範囲として，語の地理的分布を明らかにし，かつ日本語の歴史を再構することを目的としてはじめたこの調査[1]は，8か年2400地点の全計画を，予定通り完了した。本最終年度(第8年度)の調査地点数は，240である。

B 担当者

地方言語研究室が，調査のセンターとして，調査全般の企画・運営，および結果の整理にあたった[2]。

いっぽう，臨地調査は，本年度の国立国語研究所地方研究員が，下記のように地域を分担して行なった。

調査者番号	担当地域	氏名	勤務先（1965年10月現在）	住所（左に同じ）
01	北海道Ⅰ	五十嵐三郎	北海道大学文学部(助教授)	札幌市月寒西3条5丁目
02	北海道Ⅱ	長谷川清喜	北海道学芸大学(助教授)	札幌市北23条西7丁目
03	北海道Ⅲ	石垣 福雄	市立東栄中学校(校長)	北海道札幌郡手稲町西野79
04	青森	此島 正年	弘前大学教育学部(教授)	弘前市西ケ丘町6の1
05	岩手	小松代融一	岩手医科大学教養部(教授)	盛岡市山岸町1丁目1番2号
48	宮城	加藤 正信	国立国語研究所(所員)[3]	東京都豊島区巣鴨4の4晴和荘
07	秋田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部(教授)	秋田市手形東新町1
59	山形	佐藤 亮一	東北大学文学部大学院(学生)	仙台市福室字松堂市営住宅LB32の135
54	福島	三浦 芳夫	県立田村高校(教諭)	福島県田村郡三春町大町51
55	茨城	金沢 直人	茨城大学教育学部(助教授)	水戸市石川町4043の2

注 1) 昭和32～36年度(前期計画)，昭和37～39年度(後期計画)。なお，昭和30～31年度(準備期間)。沖縄は，昭和33年度から調査に加わった。

2) 室長柴田武は，9月1日付をもって東京外国語大学に転出し，その後この年度中，第一部長林大が，室長事務取扱となった。なお，室員野元菊雄は海外出張中（在ロンドン）である。

3) 加藤正信は1965年4月1日付国立国語研究所員として着任した。

11	栃木	多々良鎮男	宇都宮大学学芸学部(助教授)	宇都宮市一ノ沢町1の61
12	群馬	上野　勇	県立高崎工業高校(教諭)	沼田市西倉内町810
52	埼玉	江原　襄	市立城南中学校(教諭)	川越市南通町9の17
57	千葉	後藤　和彦	国立茨城工業高等専門学校(講師)	勝田市中根長堀6の6
58	東京	馬瀬　良雄	信州大学文理学部(助教授)	長野市淀ケ橋柳町アパートB14の1
49	神奈川	日野　資純	静岡大学人文学部(助教授)	静岡市北安東694の6
16	新潟	剣持隼一郎	県立柏崎高校(教諭)	柏崎市柏木町1255
17	富山・石川	岩井　隆盛	金沢大学教育学部(教授)	石川県河北郡津幡町字清水ホ313
18	福井	佐藤　茂	福井大学学芸学部(教授)	福井市乾徳4丁目3の26
19	山梨	清水　茂夫	山梨大学学芸学部(助教授)	山梨県中巨摩郡白根町百々3062
20	長野	青木千代吉	三水第二中学校(校長)	長野県更級郡更北村中氷鉋1089
21	岐阜	谷開　石雄	県立岐阜商業高校(教諭)	岐阜市旦の島402
22	静岡	望月　誼三	静岡大学教育学部(教授)	静岡市北安東628
23	愛知	山田　達也	名古屋市立大学教養部(助教授)	名古屋市中村区大秋町3の26
56	三重	慶谷　寿信	名古屋大学文学部(助手)	名古屋市東区山田東町3の108第一郷荘ほ号
50	滋賀	筧　大城	県立虎姫高校(教諭)	長浜市北新町4の4
60	京都	遠藤　邦基	京都大学文学部大学院(学生)	京都市左京区岩倉花園町403大久保方
29	大阪	西宮　一民	奈良を見よ。	
27	兵庫Ⅰ	和田　実	神戸大学(助教授)	神戸市垂水区西神田町3の6
28	兵庫Ⅱ	岡田荘之輔		兵庫県美方郡温泉町湯
29	奈良	西宮　一民	皇学館大学(教授)	伊勢市中村町30の14
30	和歌山	村内　英一	和歌山大学学芸学部(助教授)	和歌山市片岡町1の1
31	鳥取・島根	広戸　惇	島根大学文理学部(教授)	出雲市今市町元宮町
33	岡山	虫明吉治郎	県立岡山操山高校(教諭)	岡山市津島2413の15
34	広島	村岡　浅夫	大野中学校(校長)	広島県佐伯郡五日市町屋代121
35	山口	阿波　陽	県立下関南高校(教諭)	下関市みもすそ川町6の35
36	徳島	宮城　文雄	徳島大学学芸学部(教授)	徳島県那賀郡那賀川町島尻931の2
37	香川	近石　泰秋	香川大学学芸学部(教授)	高松市九番町公務員宿舎41
38	愛媛	杉山　正世	新田高校(教諭)	今治市河南町267

39	高知	土居　重俊	高知大学教育学部(助教授)	高知市弥生町44
40	福岡	都築　頼助	福岡学芸大学(教授)	福岡市高宮玉川町56
41	佐賀・長崎	小野志真男	佐賀大学教育学部(教授)	佐賀市赤松町中館93
43	熊本	秋山　正次	熊本大学教育学部(助教授)	熊本市若葉町36の12
44	大分	糸井　寛一	大分大学学芸学部(助教授)	臼杵市海添190
45	宮崎	岩本　　実	宮崎大学学芸学部(教授)	宮崎市下水流町190の1
46	鹿児島	上村　孝二	鹿児島大学法文学部(教授)	鹿児島市武町965
61	沖縄	外間　守善	琉球大学(助教授)	東京都杉並区上荻窪1の57

(以上地方研究員　46名)

別に，地方言語研究室員下記の2名も，本年度，全国数か所で，臨地調査を行なった。

97　上村　幸雄

96　徳川　宗賢

以上のほか，本年度は参加しなかったが，ある年度，ある地域を分担して，この「日本言語地図作成のための調査」に従事したものが，17名ある。以下にその番号・担当地域・氏名，およびその年度を示す。

調査者番号	担当地域	氏　名	年　度
06	宮　城	堀篭　敬蔵	32
08	山　形	後藤　利雄	32〜36
09	福　島	菅野　　宏	32〜33
10	茨　城	宮島　達夫	32〜33
13	埼　玉	大久保忠国	32
14	千　葉	加藤　信昭	32〜35
15	東京・神奈川	斎藤義七郎	32
24	三　重	堀田　要治	32
25	京　都	奥村　三雄	32〜37
26	大　阪	前田　　勇	32〜36
32	島　根	岡　　義重	32〜38
42	長　崎	西島　　宏	32〜34
49	三　重	杉浦　茂夫	32〜34
51	沖　縄	仲宗根政善	33〜37
52	福　島	須佐　善信	34
		(以上地方研究員)	
98	全　国	野元　菊雄	32〜
99	全　国	柴田　　武	32〜
		(以上研究室員)	

結果の整理は，地方言語研究室が行なったが，言語地理学の専門家W・A・Grootaers 神父の協力を受け，作業一般に，研究補助員白沢宏枝が参加した。

C　調　査　地　点

全調査計画8か年，2400地点での臨地調査が終わったことになるが，以下

に，本年度（第8年度）の調査地点（240），および各地点の調査者を示す。なお，調査の方法その他は，前年度（後期計画）と同じである。詳細は，年報14について見られたい。

調査地点	調査者番号
北海道	
士別市	02
磯谷郡蘭越町字港	03
増毛郡増毛町字雄冬	01
青森県	
三沢市大字三沢浜通字淋代	04
上北郡六戸町大字折茂字川原新田	04
上北郡六か所村大字鷹架字久保の内	04
下北郡東通村大字蒲野沢字石持	04
下北郡東通村大字小田野沢字畑浦	04
下北郡風間浦村大字易国間字桑畑	04
三戸郡三戸町大字貝森字杉沢	04
三戸郡南郷村大字島守字坂本	04
岩手県	
宮古市大字重茂字川代	05
花巻市西宮野目	05
遠野市小友町長野荷沢	05
釜石市青ノ木	05
東磐井郡大東町鳥海字市ノ通	05
東磐井郡東山町松川	05
西磐井郡平泉町平泉高館	05
稗貫郡石鳥谷町大瀬川字畑	05
和賀郡和賀町本畑	05
宮城県	
石巻市田代島仁斗田	48
気仙沼市大島浦の浜	48
刈田郡七ヶ宿町関	48
名取郡岩沼町押分字奥山	97
黒川郡大和町升沢	48
牡鹿郡女川町江ノ島	48
本吉郡歌津町馬場	48
秋田県	
北秋田郡比内町小坪沢	07
北秋田郡森吉町湯の岱	07
北秋田郡田代町岩瀬字越山	07
鹿角郡十和田町大湯字白沢	07
山本郡二ツ井町田代逞の木岱	07
山本郡藤里町藤琴字早飛沢	07
由利郡鳥海村百宅	07
仙北郡西木村上桧木内戸沢	07
山形県	
米沢市中心部	59
酒田市飛島字勝浦	59
酒田市本楯町新田目	97
西村山郡西川町大字大井沢字中村	59
西村山郡朝日町大谷	97
西置賜郡小国町字五味沢	59
東田川郡朝日村大字大鳥字寿岡	59
西田川郡温海町大字菅野代	59
福島県	
原町市上太田字堰場	54
常磐市大字藤原字田場坂	54
会津若松市下野伏町	54
東白川郡塙町字本町	54
南会津郡伊南村大字大原字居平	54
南会津郡只見町大字大倉字田向	54
大沼郡金山町大字川口字森ノ上	54
大沼郡昭和村大字喰丸字三島	54
相馬郡飯舘村大字草野字宮内	54
茨城県	
北相馬郡取手町台宿	55
久慈郡里美村大字徳田字山口	55
筑波郡谷田部町高須賀	55
栃木県	

下都賀郡藤岡町蛭沼 11
那須郡那須町大字高久丙小字大沢 11
那須郡黒磯町高林 11
塩谷郡塩谷村上寺島 11
群馬県
藤岡市下日野大字駒留 12
多野郡上野村大字楢原 12
新田郡尾島町大字世良田 12
埼玉県
春日部市大字梅田東 57
南埼玉郡白岡町大字白岡字東 52
秩父郡皆野町大字下日野沢字沢辺 52
千葉県
船橋市 57
千葉郡八千代町大和田 57
東葛飾郡関宿町台町 55
香取郡大栄町横山 57
東京都
(大島支庁)大島町差木地 48
(大島支庁)新島本村 58
(大島支庁)新島本村大字若郷 58
(大島支庁)神津島村 58
神奈川県
横浜市神奈川区幸ヶ谷 49
足柄上郡大井町上大井 49
足柄下郡真鶴町 22
新潟県
加茂市大字加茂 16
新井市大字長沢 20
中蒲原郡村松町大字笹目字高石 16
南蒲原郡下田村大字笠堀 16
北蒲原郡安田町保田字宮町 97
東頸城郡松之山町大字浦田字中立山 16
中頸城郡三和村字川浦 16
西頸城郡能生町大字能生 16
南魚沼郡六日町大字畔地 16
中魚沼郡川西町字原田 16
古志郡山古志村大字種苧原 16
富山県
西砺波郡福光町中ノ河内 17
中新川郡上市町伊折 17
婦負郡八尾町庵谷 17
石川県
小松市丸山町 17
石川郡尾口村字東二口 17
羽咋郡押水町字免田 17
羽咋郡志雄町字所司原 17
鳳至郡能都町字大田原 17
福井県
小浜市田烏 18
鯖江市本町1丁目 18
丹生郡清水町大森 18
南条郡河野村河野 18
山梨県
東山梨郡三富村川浦字天科 19
南巨摩郡身延町相又下 96
南都留郡足和田村西湖 19
長野県
茅野市柏原 20
南佐久郡川上村御所平 20
南佐久郡北相木村白岩 20
上水内郡小川村桐山区 20
上伊那郡高遠町藤沢片倉 20
下伊那郡阿南町新野栃洞 20
下伊那郡清内路村上清内路 20
岐阜県
恵那市中野方町大字勢井後 21
郡上郡大和町河辺 21
加茂郡七宗村上麻生本郷 21
大野郡清見村楢谷 21
大野郡白川村長瀬 21
静岡県
沼津市八幡町 22
島田市上伊太 96

天竜市熊字大地野　23
田方郡戸田村井田　22
駿東郡原町植田　22
榛原郡中川根町田野口　96
磐田郡佐久間町山香地区落井　22
磐田郡水窪町奥領家針間野　22

愛知県

碧南市字築山　23
刈谷市八幡町　23
犬山市大字犬山　21
東加茂郡松平町大津　96
北設楽郡稲武町大字小田木　23

三重県

尾鷲市九鬼町九木浦　56
鈴鹿郡関町大字坂下　56
一志郡嬉野町矢下　56
飯南郡飯高町粟野小字地ノ添　56
名賀郡青山町勝地　56

滋賀県

近江八幡市玉木町２丁目　50
伊香郡西浅井村菅浦　50

京都府

綾部市奥上林　60
天田郡三和町千束　60
与謝郡伊根町字平田　60

大阪府

大阪市東区南本町１丁目　29

兵庫県

神戸市兵庫区有馬町　27
宝塚市西谷東村　27
揖保郡新宮町千本　96
三原郡南淡町灘土生　27

奈良県

山辺郡山添村大字峰寺　29
吉野郡東吉野村大字杉谷小字中村　29

和歌山県

伊都郡花園村梁瀬　30
有田郡金屋町修理川　30
日高郡日高町比井　30
日高郡印南町田の垣内　30

鳥取県

西伯郡西伯町字下中谷　31
八頭郡若桜町字赤松　31

島根県

浜田市高田町　31
八束郡美保関町大字美保関　31
仁多郡仁多町大字三沢　31
飯石郡頓原町大字角井　31
邑智郡川本町大字川本　31
邑智郡瑞穂町大字山田　31

岡山県

笠岡市白石島　33
笠岡市真鍋島　33
吉備郡足守町大字間倉字上杭田　96
真庭郡新庄村字鍛冶屋　33
真庭郡中和村大字下和小字野辺　33
苫田郡富村富西谷小字宮原　33
英田郡西粟倉村大字影石小字谷口　31

広島県

広島市播磨屋町　34
三原市西町大黒町　34
三原市鷺浦町向田野浦　34
竹原市忠海町宮床　34
安芸郡蒲刈島町大字大浦　34
豊田郡豊町大長　34

山口県

宇部市二俣瀬区木田　96
萩市見島本村　35
玖珂郡由宇町横町区　35
熊毛郡上関町大字祝島　35
熊毛郡上関町室津　35
豊浦郡豊北町角島元山　35
阿武郡旭村大字佐々並字久年　35

徳島県

阿波郡市場町大影相乗　36
麻植郡美郷村大字中枝字下浦　36
三好郡西祖谷山村小祖谷　36

香川県

観音寺市伊吹町　37
三豊郡詫間町大字箱　37

愛媛県

松山市福角町中筋　38
今治市米屋町４丁目　38
東宇和郡宇和町鬼窪　38
喜多郡長浜町仁久　38

高知県

安芸市畑山大野　39
室戸市羽根中野大岸　39
土佐郡大川村船戸桃が谷　39
高岡郡窪川町興津浦分　39
高岡郡檮原村松原字大串　39

福岡県

北九州市小倉区銀天街　40
鞍手郡若宮町大字脇田　40
嘉穂郡嘉穂町大字大隈字上町　40
筑紫郡那珂川町片縄字下片縄　97
八女郡立花町上辺春字立石　43
田川郡添田町大字枡田　40

佐賀県

鹿島市浜町南舟津　41
佐賀郡富士村字貝野　41

長崎県

西彼杵郡外海町字神の浦小字下大野　41
西彼杵郡西彼村八木原郷白浜　41
西彼杵郡崎戸町江島郷　41
西彼杵郡崎戸町蛎の浦郷　41
西彼杵郡崎戸町平島　41
南松浦郡若松町若松郷　41
上県郡上対馬町琴　96
上県郡上県町樫滝　96

熊本県

水俣市大字久木野字下鶴　43
本渡市宮地岳町中岳　43
上益城郡矢部町大字中島字北中島　43
天草郡河浦町大字崎津　43

大分県

大分市中央町　44
南海部郡宇目町木浦内西山　44
大分郡庄内町東長宝　44
大分郡庄内町阿蘇野地区高津原　44
玖珠郡九重町大字田野字北方　44
下毛郡本耶馬渓村字樋田　40

宮崎県

串間市大字都井字迫　45
西都市大字銀鏡　45
西都市三財字水喰　97
西諸県郡飯野町大字末永字田代　45
東臼杵郡東郷村大字坪谷字石原　45
東臼杵郡北川村祝子川　45

鹿児島県

名瀬市西仲勝町　46
熊毛郡上尾久町口永良部島本村　48
大島郡瀬戸内町瀬武　46
大島郡瀬戸内町与路　46
大島郡瀬戸内町池治　46
大島郡笠利町佐仁　46
大島郡宇検村阿室　46
大島郡宇検村田検　46
大島郡竜郷村赤尾木　46
大島郡天城町瀬滝　46

沖　縄

(八重山)石垣市字平久保　61
(八重山)与那国町祖納　61
(宮古)多良間村塩川　61
南部地区(島尻郡)粟国村字東　61
南部地区(島尻郡)伊平屋村字田名　61
南部地区(島尻郡)伊是名村字勢理客　61
中部地区(中頭郡)北谷村字吉原　61
中部地区(中頭郡)勝連村字平敷屋　61

(以上　240地点)

8か年，各年度の<行政単位別調査地点数[1]>は，次の通り。参考のために，㋑ 人口地点密度(10万人あたりの調査地点数)[2]，㋺ 面積地点密度（1000km²あたりの調査地点数[3]）を付記した。

行政単位	調査地点数 調査年度 32	33	34	35	36	37	38	39	計	㋑ 人口地点密度	㋺ 面積地点密度
北海道	15	15	12	14	11	9	4	3	83	1.6	1.1
青森	9	10	9	11	10	9	8	8	74	5.2	7.9
岩手	11	12	12	23	5	9	10	9	91	6.3	6.0
宮城	7	6	9	8	9	6	5	7	57	3.3	7.8
秋田	8	9	9	14	10	8	9	8	75	5.6	6.4
山形	5	5	9	7	10	6	4	8	54	4.1	5.8
福島	10	11	11	10	13	9	7	9	80	3.9	5.9
茨城	6	11	5	8	8	4	4	3	49	2.4	7.5
栃木	5	11	4	6	4	4	5	4	43	2.8	6.7
群馬	5	12	6	4	3	4	4	3	41	2.6	6.5
埼玉	4	6	3	7	5	1	2	3	31	1.2	8.2
千葉	7	9	10	8	3	4	4	4	49	1.3	9.6
東京	2	4	5	5	7	4	3	4	34	0.4	17.0
神奈川	3	5	3	3	2	2	2	3	23	0.7	9.5
新潟	10	19	10	12	13	7	9	11	91	3.7	6.2
富山	7	2	3	5	4	4	3	3	31	3.0	7.2
石川	8	5	5	5	5	5	5	5	43	4.4	10.2
福井	8	3	3	4	2	5	4	4	33	4.4	7.7
山梨	3	10	3	3	3	2	2	3	29	3.7	6.4
長野	9	15	10	7	13	9	8	7	78	3.9	5.7
岐阜	13	6	9	7	7	7	7	5	61	3.7	5.8
静岡	7	11	8	9	9	6	6	8	64	2.3	8.2
愛知	11	5	4	6	6	5	3	5	45	1.1	8.8
三重	12	6	6	4	8	6	5	5	52	3.5	9.0

行政単位	調査地点数 調査年度 32	33	34	35	36	37	38	39	計	㋑ 人口地点密度	㋺ 面積地点密度
滋賀	3	4	4	6	7	3	2	2	31	3.7	7.0
京都	7	4	5	4	5	5	3	3	36	1.8	7.8
大阪	5	2	1	1	3	5	1	1	19	0.3	10.6
兵庫	14	20	3	1	10	9	10	4	71	1.8	8.6
奈良	8	1	2	2	4	2	2	2	23	2.9	6.2
和歌山	11	4	4	5	6	4	4	4	42	4.2	8.9
鳥取	3	3	4	4	7	4	3	2	30	5.0	8.6
島根	7	7	8	7	12	6	4	6	57	6.4	8.6
岡山	7	7	8	8	9	6	5	7	57	3.4	8.1
広島	8	9	9	10	11	7	7	6	67	3.1	8.0
山口	6	7	7	7	11	7	7	7	59	3.7	9.7
徳島	2	3	5	5	7	4	3	3	31	3.6	7.6
香川	2	2	3	3	5	3	2	2	22	2.4	11.6
愛媛	6	5	8	6	10	5	6	4	50	3.4	8.9
高知	6	6	9	7	10	5	4	5	52	6.1	12.0
福岡	5	6	6	7	4	6	4	6	44	1.1	9.0
佐賀	2	2	2	5	2	3	2	2	20	2.1	8.3
長崎	7	8	8	5	14	8	6	8	64	3.7	15.6
熊本	6	7	7	8	11	6	5	4	54	2.9	7.2
大分	6	6	7	10	7	6	5	6	53	4.3	8.4
宮崎	6	7	7	10	7	6	6	6	55	4.9	7.1
鹿児島	11	11	11	15	11	13	9	10	91	4.6	9.8
沖縄	×	4	13	10	11	7	7	8	60	6.2	25.0
全国	323	343	309	336	354	265	230	240	2400	2.5	6.5

注 1) 各地方研究員の担当地域は，かならずしも行政単位（都道府県）と一致していないことに注意。

2) いっぱんに，言語地理学的調査にあたって，地点の密度を示す場合，<1地点あたりの人口>を示すことがあるが，ここでは<人口10万人あたりの地点数>を挙げた。この方が実状をよく示すことができると思う。低い数字は，地点の粗いことを示し（例：東京・大阪などの密集地域），高い数字は，地点の網の目の細かいことを示す（例：岩手・秋田・島根・高知などの人口密度の低い地域，沖縄などの言語的に注目すべき地域）。なお，ここでは，昭和35年現在の人口を基準にしている。

3) <1地点あたりの面積>を示すかわりに，ここでは，<面積1000km²あたりの地点数>を挙げた。この方が，人口密度などと，平行的に考えることができる。低い数字は，地点の粗いことを示し（例：北海道は別格として，山形・福島・長野・岐阜などの山岳無人地帯の多い地域），高い数字は，地点の網の目の細かいことを示す（例：東京・長崎・沖縄などの島嶼部の多く，また言語的に注目すべき地域，東京・大阪などの人口密度の高い地域）。

なお，この調査は，1903年以前出生の男子を対象として行なわれた。昭和35年現在，有資格者は全国で約480万人と推定される。もしこの層のみをとって<人口地点密度>を算出すれば，全国について50（すなわち2000人について1地点）となる。

日本言語地図を，外国の代表的な言語地図と比較すれば，次の通り[1]。地点密度の観点から言えば，全国域言語地図としてまずまずの状況である（調査地域の広さから，地点の絶対数は極めて多い）が，項目数の少ないことが目立つ。

地図名（略称）	主編者	地点数	人口地点密度	面積地点密度	項目数
糸魚川言語地図（LAI）[2]	グロータース，柴田，徳川，馬瀬	183	300.0	265.6	385
スイス・ドイツ語地域言語地図（SDS）	Hötzenköcherle	573	14.3	27.0	2600
オランダ・ベルギー言語地図（NDA）	Blancquaert	2000	13.3	38.5	141文
ベルギー南部言語地図（ALW）	Remacle	300	8.5	17.5	4150
スイス全国民俗地図（ASV）	Weiss	387	7.0	9.3	150
ニューイングランド言語地図（LANE）	Kurath	431	4.0	1.8	814
日本言語地図（LAJ）	国立国語研究所	2400	2.5	6.5	285
カタロニア言語地図（ALCAT）	Griera	101	2.5	1.7	2886
ルーマニア言語地図（ALR）	Pop	388	1.9	1.3	2160
フランス言語地図（ALF）	Gilliéron	639	1.5	1.2	1920
スペイン・ポルトガル言語地図（API）	Navarro	528	1.5	0.9	2000

注 1）

		地点数	項目数
ドイツ言語地図（DSA）	Wenker	40736	40文
ドイツ語彙地図（DWA）	Mitzka	48381	200
ドイツ民俗地図（DVS）	Röhr	23000	243

以上は通信調査で，すぐに比較できないが，圧倒的な地点数を誇っている。

2）糸魚川言語地図は，出版準備中のものであるが，参考として掲げた。

イタリー・スイス言語地図（ＡＩＳ）	Jaberg & Jud	407	1.0	1.3	2000

D 出 版 計 画

言語地図作成のための調査が完了したので，昭和40年度から「日本言語地図出版」のための作業が行なわれる。綿密な日程は立てにくいが，６か年計画で各年約50枚（計300枚）の分布地図を作ることになる。印刷版面はＢ２（新聞の見開きの大きさ），多色刷りを計画している。各図には，簡単な解説をつけ，別に，この調査全体についての解説書をつける予定である。

（徳　川）

各地方言の共通語との対照的研究

A 目的と意義

地方における共通語の教育，ことに共通語の文法の教育に役立つ資料を得るために，各地方言の文法と共通語の文法とを対照的に研究する。また，昭和39年度をもって，「日本言語地図作成のための調査」の8か年の計画が終わるので，昭和40年度以降に地方研究員に委託すべき研究の準備を兼ねる。

B 計画の概要

研究期間は昭和38年度から3か年の予定である。また，対象とする方言は，秋田市，鹿児島市，京都市の3方言とする。(研究方法その他に関しては国立国語研究所年報15，P.22以下を参照)。

C 39年度の経過

昭和38年度中に，秋田市・鹿児島市の2方言については，録音，テキストの作成，カード化を終えたので，昭和39年度には，京都市方言の録音とテキストの作成にとりかかるとともに，鹿児島市方言の文法について，現地で質問調査を行なった。

(1) 京都市方言の録音とテキストの作成

インフォーマント10人について，2人ずつの対話を合計約8時間録音した。そのうち，1時間20分の分を文字化して分析用テキストとした。文の数にして約1100である。

なお，インフォーマントの選定その他について，京都大学教授遠藤嘉基氏および，遠藤邦基氏（国立国語研究所地方研究員）の協力を得た。

(2) 鹿児島市方言の質問調査

鹿児島市において，インフォーマント5名について，文法に関する第1回の質問調査を行なった。インフォーマントの選定その他については，鹿児島大学

教授上村孝二氏（国立国語研究所地方研究員）の協力を得た。

D 今後の予定

昭和40年度には，秋田市・鹿児島市・京都市の3方言のそれぞれについて，既に得た資料の分析と，質問調査とを行なう予定である。

E 担当者

担当者は地方言語研究室の次の3名である。

柴田　武（39年8月まで），上村　幸雄，徳川　宗賢

また，研究補助員白沢宏枝が研究を補助した。

（上　村）

中学校生徒の言語能力の発達に関する研究

国語教育研究室では，小学生の言語能力の発達に関する調査研究（28年度～35年度）に引きつづいて，中学生の言語能力の発達に関する研究を行なう予定であった。そして，この調査のために，中学校1年から3年間の言語能力の発達の実態，傾向，問題点等を概観し，中学校の特殊性に適した調査方法，調査問題等を検討しておく必要を感じ，大都市東京をはじめ，地方都市・農村・山村・漁村・鉱業地域など各地域の特殊性をもった中学校の生徒の言語能力（聞き方・話し方・読解・読書量（読書速度）・作文・文字（漢字）・語彙・文法・表記など）の実態についての概観調査を実施し，また，全国的規模で，中学校の国語科学習指導の実態調査を実施した（36年度～38年度）。39年度から，こうした成果に立って，問題をしぼって，次のように三つの研究調査に着手した。

Ⅰ　中学生の漢字習得に関する研究

Ⅱ　中学生の言語能力構造の研究

Ⅲ　中学校言語教育教材の研究

Ⅰは，言語能力の発達のうち，特に，学校での学習以外に，読書や周囲の文字環境から漢字を習得することの多い（長岡市における文字学習の調査結果）漢字力について，その習得状況や，発達の様相を集中的に追究しようとするものであり，

Ⅱは，小学生の言語能力の発達の研究の継続として，各言語能力の発達を調べ，その相関関係の側面から，中学生の言語能力の構造の特質をみようと試みるものであり，

Ⅲは，中学生の言語能力をみるために，国語科教科書を主として研究しようとするものである。

Ⅰ～Ⅲの研究調査には，それぞれ直接の研究担当者（別掲）があたったが，計画・問題作成・調査の実施の過程では，随時，室員の共同討議にかけたり，調査に参加したりして，研究作業をすすめた。なお，研究補助員川又瑠璃子・福田昭子が，調査の実施・集計整理など，作業の一般について助けた。また，

一定期間，数名の臨時補助者が一部の集計作業を助けた。

なお，前年度にまとめられた小学生の言語能力の発達に関する研究の総合的な報告書，国立国語研究所報告26『小学生の言語能力の発達』（A5判　604ページ　明治図書出版　発行）が出版された。

Ⅰ　中学生の漢字習得に関する研究

A　目的・意義・担当者

中学生が義務教育課程終了までに，どれくらいの漢字をどのようにして習得するか，中学校3年間にわたり，事例的に，特定個人についての漢字の習得状況を量的・質的に追跡調査し，中学生の文字習得の可能な量とその習得状況・過程・要因を推定しようとするもので，従来，類をみない研究である。この研究は，芦沢節が担当した。

B　本年度の作業

1　調査方法

中学生の漢字力をくわしく調べるというこの研究の目的に沿って，

(1)　当用漢字を中心に（表外字にも及ぶ）全数調査を実施し，それを，中学3年間継続して，追究する。

(2)　全数調査をたてまえとするので，調査方法として，消却方式をとり，入学時に全数調査をし，正しく読み書きできた漢字が，その後もこの調査で，正しく読み書きでき，習得が安定したと認められた場合は，調査対象文字からはずして，新しく表外字をさし加え，調査の負担量の過重になるのをふせぐ。

(3)　できるだけ精密に調査を進めるために，事例研究のかたちをとり，特定の生徒を調査する。

(4)　特定生徒の全数調査の補いとして，全数調査での問題点や習得の確度を吟味するために，該当学年の中学生（集団）に検証テストをおこない，全数調査の結果の解釈資料，次の調査への修正資料を得る。

(5) その他，中学生の言語能力構造の研究で実施する，各言語能力テストの結果との関係をみる。

(6) 作文等によって，調査，テスト等，意図的場面によらない，自然のままの中学生の漢字の使用力も，あわせてみる。（担当　根本今朝男）

(7) 漢字の習得要因資料として，学校での成績その他の資料を参考にする。

2　調査対象

調査の実施協力学校　北区稲付中学校（校長　伊東甚吾氏　国語主任　吉村安夫氏。北区教育委員会指導主事　相原正志氏推薦）

被調査者　昭和39年度新入生　8人（男4・女4，知能・国語学力等，学級で中位のもの）を，全数調査の対象生徒にしたが，他の検証テストや言語能力テスト等には，同校，1年生（348人）および，表外字予備テストに，同校3年生（2学級分）が参加した。

また，作文による漢字の使用力をみるために，北区の王子中学校（校長大谷正昌氏），清至中学校（脇田清氏），北中学校（岩崎六郎氏），豊島中学校（臼井紀之郎氏），神谷中学校（小山一雄氏）の5校の中学生（1～3年，各1学級分）に，課題作文を書いてもらった。

3　調査の実施

第1回　当用漢字(1850字)の全数読み書き調査（付　表外字(100字)の読み）
（39年4月28日～7月15日　延13回）

1回のテスト所要時間は，放課後の時間を利用するので，1～2時間。

第2回　当用漢字(1850字)の全数読み書き調査（付　表外字の読み 220字）
（39年12月10日～40年3月5日　延11回）

その他，集団的に検証テスト，又は準備テスト等を行なう。

○検証テスト　（当用漢字の書き）　（39年12月10日）

○　〃　（当用漢字の読み）　（40年3月24日）

○表外字読みの準備調査（表外字1500字）　（40年2月26日）

言語能力の発達構造研究のためのテストのうち，

○第1回の漢字力テスト　（当用漢字の読み200字，書き＜当用漢字・教育

漢字＞100字）　　（39年6月）

○第2回の漢字力テスト　（当用漢字の読み170字，書き＜当用漢字・教育漢字＞100字）　　（40年2月）

（この漢字力テストの結果が，当用漢字全数調査の検証テストでもある。）

○作文における使用漢字力調査　　（39年12月）

調査には，次のような方法を用いた。

（読　み）

当用漢字を当用漢字音訓表で認められている音訓全部にわたってしらべる。カードによる1対1方式（個人調査）で，読みの力を追究する。

通	交通 通る　通う

左図のように，見出しの漢字のほか，その文字の音と訓が出るような語形をあらかじめカードに記入しておいて，それを読ませ，反応集計表に反応をくわしく記入する。

（書　き）問題用紙に記入させる集団調査形式。文字の意味が出やすい文脈や語脈を与えて，目的の文字を記入させる。

〔例〕　窓（まど）をあける。　　西暦（せいれき）1964年。

読みでは，音・訓両方にわたったが，書きでは，原則として生徒に親近性のある方の読みかたを一つとった。

教育漢字　用紙　16枚　　当用漢字　用紙　22枚

4　結果のあらまし

結果については，目下，整理中のものもあるので，第1回めの当用漢字全数読み書き調査の結果について，その概要だけをあげておく。

第1回の当用漢字全数読み書き調査（付 表外字 100字）の結果を数量的にみると次のようで，表1は教育漢字・別表外当用漢字・字表外（雑誌九十種の用字調査「現代雑誌九十種の用語用字―漢字表」で，頻度の高い表外字）が，どの程度読み書きできたかをみたもの。表2は個人別にみると，それぞれどれだけの文字が読み書きできるかをみたものである。

表1　当用漢字全数読み書き調査結果

正答率	教育漢字 <881字> 読み 字	読み %	書き 字	書き %	別表外当用漢字<969字> 読み 字	読み %	書き 字	書き %	表外字 <99字> 読み 字	読み %
100%(全員)できた漢字	790	89.7	352	40.0	187	19.3	18	1.9	16	16.2
87.5(7人) 〃	70	7.9	164	18.6	117	12.1	20	2.1	10	10.1
75.0(6) 〃	12	1.4	114	12.9	103	10.6	30	3.1	8	8.1
62.5(5) 〃	9	1.0	76	8.6	87	9.0	36	3.7	11	11.1
50.0(4) 〃			73	8.3	96	9.9	50	5.2	8	8.1
37.5(3) 〃			56	6.4	84	8.7	73	7.5	6	6.1
25.0(2) 〃			28	3.2	75	7.7	79	8.2	7	7.1
12.5(1) 〃			15	1.7	88	9.1	150	15.5	9	9.1
0 (0) 〃			3	0.3	132	13.6	513	52.9	23	23.2

表2　個人別成績一覧

	教育漢字 <881字> 読み 字	読み %	書き 字	書き %	別表外当用漢字<969字> 読み 字	読み %	書き 字	書き %	表外字 <99字> 読み 字	読み %
M・K	880	100	842	95.7	759	78.3	359	37.0	60	60.6
T・N	875	99.4	690	78.4	598	61.7	126	13.0	49	49.5
M・M	877	99.7	800	90.9	544	56.1	184	19.0	41	41.4
N・M	880	100	642	73.0	718	74.1	148	15.3	63	63.6
E・K	879	99.9	757	86.0	486	50.2	201	20.7	49	49.5
I・K	838	95.2	597	67.8	307	31.7	84	8.7	38	38.4
R・K	850	96.6	528	60.0	352	36.3	79	8.2	28	28.3
K・F	876	99.5	703	79.5	529	54.6	190	19.6	46	46.5
平　均	869.4	98.8	694.9	79.0	536.6	55.4	171.4	17.7	46.8	47.3

注　1　表1・表2で，読めたというのは，1字のもつ音・訓全部をつくして読めたという数ではなく，音訓すべてにわたって読めたものはもちろん，音訓どちらか読めたものも入れた数である。従来の漢字調査の結果と比較できるので，一応，その方法で整理してみた。

注　2　第1回の表外字テストでは，100字について調査したが，印刷のミスのため，集計は99字とした。

これが，今後，３年間で，数量的にどう発達していくかをみることになる。しかし，単に漢字の量だけでなく，この調査では，質的な問題も解明されていくわけで，たとえば，読みでは，音・訓全部にわたって調べたために，次のような問題も出てきた。

教育漢字の読みの具体例

a　全員（８人）が音訓ともによく読めたもの（次期テストでは，テスト文字から消去してもよいと認められるもの）　331字

例　動(動物　動く)　短(短所　短い)　正(正確　正面　正しい)　曲(曲線　曲り道)　楽(楽園　音楽　楽しい)

b　全員が音訓ともに読めたもの（ａとの違いは，音・訓どちらかの反応の仕方に，時に，渋滞が認められたが，とにかく正しく読めたもの）　222字

例　祭(祭典　お祭)　交(交通　交わる　交ぜる)　日(元日　日用品　日の丸　五日)　名(有名　本名・大名　名まえ)　象(気象・印象　象)

c　１音１訓で音のよいもの（それぞれの音では全員が読めているが，訓は低い）　72字

例　的<まと>　室<むろ>　公<おおやけ>　節<ふし>　社<やしろ>　費<ついやす>　唱<となえる>　和<やわらぐ>　練<ねる>　仕<つかえる>　保<たもつ>　牧<まき>　果<はたす>

d　１音１訓で訓のよいもの（訓では全員が読める）　59字

例　坂<ハン>　何<カ>　思<シ>　持<ジ>　谷<コク>　湯<トウ>　焼<ショウ>　荷<カ>　申<シン>　麦<バク>　川<セン>　追<ツイ>　深<シン>　夕<セキ>　声<セイ>　秋<シュウ>　顔<ガン>　孫<ソン>

e　１音１訓で，音訓同程度のできのもの　22字

例　富　誤　減　至　疑　父　君　防　祝　補

f　音・訓の反応例

<２音>

京(東京８　京阪５)　体(体操８　体裁１)　役(現役・使役１　役所・役に立つ８)　発(発達８　発起人３)　期(学期８　最期３)　業(卒業８　業火０)

暴(暴風雨8　暴露1)　対(反対8　一対4)　雑(複雑8　雑木4)

＜2音1訓＞

政(政府8　摂政2　／政0)　留(留学8　留守4　／留める0)

興(興味8　興亡4　／興る1)　拾(拾得2　五拾円4　／拾う8)

解(解釈・理解8　解毒2　／解き分ける5)　率(能率8　引率4　／率いる1)

切(親切8　一切2　／切る8)　回(三回8　回向0　／回す8)

＜1音2訓＞

断(判断8　／断つ4　断わる8)　苦(苦心8　／苦しい8　苦虫1)

基(基本8　／基づく6　国の基0)　著(著者7　／著わす6　著しい4)

病(病院8　／病む4　病3)

＜2音2訓＞

音(音楽8　母音1　／音8　音色6)　平(平気8　平等7　／平ら8　平仮名2)　歩(歩行7・散歩8　歩合5　／歩む7　歩く8)　後(午後8　後悔5　／後ろ姿8　後の世5)　間(時間8　間数・一間0　／この間8　昼間7・貸し間6)

＜多音多訓＞

重(重大8　重複1　／重い8　重ねる7　八重桜7)　2音3訓

生(先生8　一生8　／生きる8　生まれる8　生糸5　生返事5)　2音4訓

納(納入3　出納5　納屋2　／納める8)　3音1訓

行(旅行7　行列6　行脚0　／行く8　行く末8　行なう8)　3音3訓

上(上下8　／上8　上手5　仕上げる8　上り列車7)　1音4訓

上のように，教育漢字は読めるといっても，音・訓の内部に立ち入ってみると，必ずしもそう言いきれない面も出てくる。これらの読みにくい音や訓の中には，特殊な読み方もあるので，中学1年生では無理と思われるが，しかし，相当使用度の高いものも読めていない。小学校の段階で提出されるこれらの教育漢字は，新出漢字での読みと，その後の読みかえとで，その音訓を学習するようになっているが，全部提出されつくしていない。また，その読みを含む語が，小学生の理解度からいって抵抗がある，あるいは親近性がないなどから，こうした結果が生ずるのではなかろうか。中学生の漢字学習は，読みでは，当

用漢字に重点が置かれるので，小・中両段階での漢字学習がよほど系統的に行なわれないと，基本的な教育漢字の学習も，音訓の面で，断層が生ずる危険性のあることを示していると思われる。

別表外当用漢字では，音訓の差がさらに著しくなるが(具体例は省略)，今後の学習にまつ文字なので，これからの問題となる。

全員が完全に読めたもの91字には，次のように，

枚 誌 廊 庁 晶 帽 乾 蓄 宙 項 段 津 菓 座 巨 滝 宅
晩 塁 班 般 菊 箱 鑑 卓 姫 閣 劇 矢 紹 介 稚 棒

など，音のみ，訓のみの字が多い。

また，第1回表外字100字中，全員が読めたものは16字で，

藤 僕 岡 崎 阪 伊 杉 鹿 吾 智 呂 鶴 塚 堀 昌 亭

など，人名・地名関係のものが多く，習得の内省でもそれらとの関連が多く認められた。

書く力（教育漢字）は，読みに比べると低く，また，書けない字，書きにくい字も，従来の調査結果と共通する（例　6年用漢字に書けない字が多い）ものが認められた。

例　2人しかできなかった字（28字）

資 疑 提 純 益 納 革 拡 歓 境 財 供 衆 程 推 拝 創
就 勧 展 否 臨* 誤* 従* 構*（以上6年用漢字，＊印以外は，小学生の6年終末時教育漢字全数調査結果でも正答率の低い字。以下同じ）

貯 仮* 解*（5年用漢字）

1人しかできなかった字（15字）

勤 穀 欲 陛 孝 墓 誠 派* 称* 可* 採* 己*（以上6年用漢字）

管 講*（5年用） 旗（4年用）

1人も書けなかった字（3字）

策 厳（6年用） 付（4年用）

（cf.「稲」は教育外当用漢字であるが，固有名詞に関係する文字なので全員が書けた。しかし，同じく固有名詞に関係する文字でも，「付」は，付着する意味で問題を出したことにも関連するらしく，教育漢字でありながら，書けてい

ない。音訓とともに，漢字の意味(義)・用法に対する問題を示唆している。)

当用漢字では全員が書けたもの18字，半数以上が書けたものが154字で，それらの多くは，1年入学後，学習した漢字や，地名・人名，日常生活と親近性のあるもので，漢字を書く力と学習要因・地域的要因の関係が，ここでも見られた。

D　今後の予定・見通し

この調査は，消却方式をとりながら，今後も年間に二度の全数読み書き調査（表外字の数を順次にふやす）と，全数読み書き調査で得た問題点を検証するテストをくり返し，3年間にわたって，漢字習得についての量・質両面からの研究を続ける予定であり，最終的には，この事例研究で得た結果にもとづき，大量調査をも実施し，それらの結果をまとめて，報告書「中学生の漢字習得の研究」を刊行したいと思っている。

（芦　沢）

Ⅱ　中学生の言語能力構造の研究

A　目的および担当者

中学生の言語能力の発達を各言語能力間の相関分析からあきらかにし，そのことを通して中学生の言語能力構造を考えようとする。

この研究は，村石昭三が担当した。テストは，芦沢　節，村石昭三，根本今朝男の分担作成による。

B　従来の研究経過

1.「小学生の言語能力の発達に関する調査研究」(昭28～昭37)において，言語諸能力の相関の学年的発達，諸要因の相関の学年的発達，同一言語能力の各学期間の発達的相関を調べた。そこでは，1）各言語能力相互の相関の程度をみると，全体的に低学年では比較的高いが，中学年では低い。しかし，高学年になると，若干上昇する傾向がみられる。2）6年間を通じて，他の言語能

力と最も高い相関を示しているのは，漢字の読字力であり，最も低い相関を示しているのは話す力である。3) 各学年ごとに，言語能力で最も相関の高いのは，低学年では読字力，中学年では文法，作文，読解力，高学年では語い，文法，作文，読字力などである，ことなどが成果として報告された。（国立国語研究所報告26『小学生の言語能力の発達』第2編 言語諸能力及び発達諸要因の相関 P21～P42 昭 39.10）

2. 「中学生の言語能力の概観調査」（昭.36）において，言語諸能力の相関の学年的発達を調べた。そこでは，東京都・四谷第二中学校の各学年の各1学級につき，漢字の読み，漢字の書き，読解，読書速度，表記，語い，文法，聞くの各言語能力間の相関分析を試みた。おもな結果は，1) 各言語能力間の相関係数は，第1学年では，.85～.10，第2学年では，.77～.11，第3学年では，.80～.17の間にあって，これらは前記の小学生の各言語能力相関よりも，かなり高い係数がでている。2) ここで調べたかぎりでの各言語能力相関のうち，漢字の読みは他の言語能力と最も高い相関を示しており，聞くは他の言語能力と最も低い相関を示していて，これら2点の傾向は小学生の各言語能力相関の結果と同様である。しかしながら，読解の場合は小学生の相関の結果とことなり，他の言語能力とかなり高い相関を示していることが注目されるし，さらに読書速度は小学生の相関結果ほど高い相関を示すにいたっていない。3) 読解力の発達については，検定の結果，学年間に有意な差を見いだすことができなかったが，この点は，小学生の，同一言語能力の学期間の発達的相関分析において，読解力は発達の予測が困難であるという結果とあわせて，さらに検討の必要がある。

C 本年度の作業

東京都北区立稲付中学校1年生，348名を対象にし，昭和39年6月，昭和40年2月の2回にわたって，言語能力テストを実施した。その言語能力テストの構成は，39年6月テストについてみれば，概略次のようなことになる。

言語能力	構成	総点
漢字の読み	1年用漢字，2年用漢字，3年用漢字 提出度の少ない漢字，未提出漢字	200
漢字の書き	教育漢字，当用漢字	100
語い	読書・生活語い，外来語，学習語い，故事成語，読解テスト語い*	82
文法	助詞の使用，文の連接，敬語法，用言の活用，その他	48
読解	文学的文章，科学的文章，論説的文章	58
かなづかい	＜聴写による＞	87
送りがな		80
作文	課題「私」	5段階評価

＊読解テスト語いとは，上記言語能力テストの中にある読解テストの出題文にでている語いをいくつかとりあげ，語い理解の程度を調べたものである。読解力と語い力との関係をその角度から調べようとしたもの。

上記の言語能力テストの各問題は，中学校3年間，できるだけ同一問題で，能力の発達をみることができるように難易がとりまぜて提出されている。なお，40年2月テストについては6月テストのものをだいたい踏襲したが，かなづかいテストを省略し，ひとつひとつの問題について，1年生でも正答率が高く，弁別性をもちえないものは捨て，新しい問題を部分的に補充した。

1　相関分析の方法

相関係数の算出は偏差積法にしたがった。標本としては，348名の結果から乱数表によって100名のものを抽出した。相関分析は最初に，1）各言語能力相互の相関関係をみ，2）次に，各言語能力の下位能力間の相関関係をみることにしたが，後者についてはその作業を完全に終わるまでにいたっていない。

2　相関分析の結果

1）各言語能力間の相関関係は表1の通りである。

表1　各言語能力間の相関係数

	漢字の読み	漢字の書き	語い	文法	かなづかい	送りがな	読解	作文
漢字の読み		.76	.82	.75	.74	.60	.70	.64
漢字の書き	.76		.70	.64	.68	.67	.66	.56
語い	.82	.70		.75	.67	.52	.82	.63

	漢字の読み	漢字の書き	語い	文法	かなづかい	送りがな	読解	作文
文法	.75	.64	.75		.70	.56	.70	.56
かなづかい	.74	.68	.67	.70		.68	.64	.64
送りがな	.60	.67	.52	.56	.68		.51	.45
読解	.70	.66	.82	.70	.64	.51		.54
作文	.64	.56	.63	.56	.64	.45	.54	

2) 各言語能力の下位能力間の相関関係は，表2～表6-2の通りである。なお，かなづかい，送りがな，作文に関しては下位能力としての項目をたてなかったので，本分析の対象にしなかった。

表2 漢字の読み

	1年用	2年用	3年用	教科書提出度少	未提出
1年用		.91	.86	.74	.68
2年用	.91		.85	.79	.73
3年用	.86	.85		.82	.72
教科書提出度少	.74	.79	.82		.73
未提出	.68	.73	.72	.73	

＊1年用，2年用，3年用とは当該学年の教科書に比較的多く提出されている漢字をさす。

表3 漢字の書き

教育漢字×当用漢字	.76

表4 語い

	読書・生活語い	学習語い	故事成語
読書・生活語い		.65	.65
学習語い	.65		.42
故事成語	.65	.42	

表5 文法

	文の連接	敬語法	用言の活用	その他
文の連接		.39	.47	.32
敬語法	.39		.29	.27
用言の活用	.47	.29		.42
その他	.32	.27	.42	

表6－1　読　解

	文学	科学	論説
文　学		.47	.68
科　学	.47		.62
論　説	.68	.62	

表6－2　読　解

	主題・意図	要旨	要点	文脈	その他
主題・意図		.39	.47	.56	.55
要　旨	.39		.29	.34	.30
要　点	.47	.29		.55	.38
文　脈	.56	.34	.55		.61
その他	.55	.30	.38	.61	

3　結果に対する考察

1)　各言語能力間の相関係数は，表1によれば，.82～.45の間に含まれており，このうち最も高い相関係数は，漢字の読みと語い，読解と語いとの間の相関であり，最も低い相関係数は，作文と送りがなとの間の相関である。概して相関係数は，小学生の言語能力の相関分析の場合よりもかなり高くあらわれているし，しかも読解が他の言語能力とも高い相関を示していることが特徴的であるが，これらの結果は，中学生の言語能力の概観調査における相関分析の結果と符合する。

2)　各言語能力を構成する下位能力の相関係数は，漢字の読み（表2）では.91～.68の間にあり，未提出漢字の読みの場合でも，既出（1年用，2年用，3年用）漢字の読みとの相関が比較的高く出ているのが注目される。漢字の書き（表3）に関する，教育漢字と教育外当用漢字との相関も比較的高く出ている。語い（表4）に関しては，下位能力間の相関は漢字の読みおよび漢字の書きにくらべて，それらほど高くなく，むしろ，文章ジャンル別読解各能力の相関（表6－1）の度合いと同程度である。文法（表5）および読解の主題，意図，要旨，要点，文脈，その他の能力間には少しの相関がみられる程度であり，これらの言語能力構造の複雑さをあらわしている。なお，各言語能力の下位能力間の相関関係を「中学生の言語能力の概観調査」でも，漢字の読み，漢字の書きに関してのみ試みたが，これらに関するかぎり，上記の結果とだいたいにおいて一致している。

E 今後の予定

残された作業として，上記報告に関連したいくつかの統計処理および昭和40年2月実施の言語能力の相関分析がある。

（村 石）

Ⅲ 中学校の言語教育教材の研究

——昭和38年度使用中学校国語科教科書の主要語句調査——

A 目的・意義および担当者

この調査研究は，中学校生徒が，三年間の国語科学習をとおしてどのような語や句にふれ，学んでいくかを教科書の側からみていこうとするものである。調査資料としては，昭和38年度使用の国語科教科書13種（11社）をえらんだ。選定の条件は厳密な基準を設けたわけではないが，調査結果の客観性と作業の現実性との観点から，採用部数が多いと思われるもので，比較的入手しやすいものとした。採集する語や句は，だいたいのところをできるだけ客観的におさえるために，教科書で「主要語句」「重要語句」「注意すべきことば」などとして指定している語や句に限定した。

この調査研究は，これ自身独立したものでもあるが，それよりも，国語教育研究室が現在おこなっている「中学生の漢字習得に関する研究」のための基礎的資料を得ることを主目的としてのものである。

この調査研究は，根本今朝男が担当した。

B 本年度の調査研究

資料とした教科書の出版社名・教科書名(便宜上記号で示す)，主要な語や句の指定の形，学年別提出数等を示すとつぎのとおりである。

出版社名	教科書名	指定のかたち	1年	2年	3年	計
A	a	「重要語句」として小単元ごとにまとめて	378	479	506	1363

B	b_1	「この教科書に出たおもなことば」として巻末に	397	486	567	1450
	b_2	「注意すべきことば」として巻末に	863	1085	991	2939
C	c	「主要語句」として小単元ごとにまとめて	317	302	260	879
D	d	「主要語句」として小単元ごとにまとめて	612	842	922	2377
E	e_1	「ことばの意味や使い方を調べよう」として小単元ごとにまとめて	738	691	663	2092
	e_2	「たいせつなことば」として小単元ごとにまとめて	687	829	924	2440
F	f	「主要語句」として小単元ごとにまとめて	571	531	656	1758
G	g	「主要語句」として小単元ごとにまとめて	326	501	627	1454
H	h	「主要語句」として小単元ごとにまとめて	562	670	576	1808
I	i	「重要語句」として小単元ごとにまとめて	378	332	244	954
J	j	提出ページに頭注の形式で	504	498	400	1402
K	k	「重要語句」として小単元ごとにまとめて	320	436	356	1112

本年度は、教科書に指定されている語や句について、それを含む１センテンスずつを採集カードに写し取る作業を行なった。本年度中に b，e_1，j，k の４教科書（各１年～３年）6056語（または句）の採集をすませた。40年度には，本年度にひき続いてカード化の作業をつづけ，分析研究の作業に移りたい考えである。

（根　本）

言語表現における場面の効果の研究

A　目的と意義

場面によって言語表現がどのような変容を示すかを，伝達という観点から調べる。あわせて，場面の分析および言語表現の分析を行なう。

分析の内容はつぎのとおりである。

① 主語の有無と場面

② コソアドと場面

③ 敬語と場面

④ 人を表わす語と場面

B　担　当　者

言語効果研究室の高橋太郎が担当し，屋久茂子がこれをたすけた。

C　これまでの作業経過

この研究は昭和38年度から始め，その年度にカードを2万枚作成した。

D　本年度の作業

前年度に引き続き，①「主語の有無と場面」の分析カードを約4万枚作成した。材料とした作品は，次のとおりである。

芥川竜之介「羅生門」，泉鏡花「高野聖」，菊池寛「恩讐の彼方に」，国木田独歩「武蔵野」，佐藤春夫「田園の憂鬱」，里見弴「多情仏心(前編)」，志賀直哉「暗夜行路(前編)」，鈴木三重吉「桑の実」，谷崎潤一郎「春琴抄」，田山花袋「蒲団」，永井荷風「つゆのあとさき」，二葉亭四迷「平凡」，堀辰雄「風立ちぬ」，宮沢賢治「銀河鉄道の夜」，宮本百合子「伸子(上)」，武者小路実篤「友情」，森鷗外「阿部一族」(以上岩波文庫，ただし「羅生門」「暗夜行路」は現代表記版。) 第4四半期にはいってからカードの分類を始めた。

作業内容は，ほぼ次の通りである。

1_1　カードは，原則として１文ごとに，文脈をつけて１枚とった。

1_2　会話文をふくむ文は，全体として１枚のほかに，会話文自体を１文１枚ずつとった。

1_3　１文か２文か認定しがたいものについては，両様にカードをとった。

2_1　「それから」について，主語のあるものと，ないものに分け，主語のあるものについては，その形式によって分類した。

2_2　分類しがたいものについては，問題解決を次年度にまわした。

3　補助的研究として，「暗夜行路」「蒲団」「阿部一族」については，が格の名詞（助詞の「が」を伴った名詞）と動詞の組み合わせがどのような文法的関係を保っているかを調べるためのカードをとった。

なお，カードは，図書カードの大きさである。１枚におよそどのぐらいの文があるかを示すために，例をあげる。下線部が，問題にする文である。

まっ黒い人影が近寄って来た。ボーイだった。何か言っているが，風にさらわれて少しもわからなかった。ボーイは帰って行った。それからしばらくして彼は下へ降りて行った。からだがすっかり冷えていた。

彼はかなり疲れていた。<u>しかし習慣から，雑誌を持って寝床へはいった。</u>しかしそれは十分しないうちに文句の意味が彼から遠のいて行った。半分眠ったようになって，それでも彼はそれへ追いすがろうとし，そして無理に意識をはっきりさすと，字は読みながら，もう意味は勝手な夢になっていた。いつかまぶたが目をおおう。彼は快く眠りの中へ沈んで行った。が，まだ彼は何かしら考えていた。この二，三か月の目まぐるしい，いやな生活，そのあとにようやく来た，これは安らかな大きい眠りだ。こん事を思っていた。（「暗夜行路」 前・149〜150ページ）

E　今後の予定と見通し

40年度と41年度に「主語の有無と場面」について大体の分析を終わる。

（高　橋）

対人的言語行動の研究

A 目的と意義

小学校高学年から中学・高校にかけての青少年期は，その対人的心理と行動の面でも最も変動の多い，そして最も微妙な多くの問題をかかえた時期である。青少年期のこのような事がらについて学校教育や社会教育の上で役立つ資料を得るために，ここでは，かれらの対人的心理と言語行動に関する問題を，家庭と学校という，彼らにとって最も身近な集団内の生活場面に焦点をおいて，調査研究する。

B 内容と方法

中学生を中心とし，小学校高学年生，高校生についての，質問紙法による生徒調査

① 家族内における，とりわけ親と子の間におけるコミュニケーションの量と質

② 学校のクラス内における児童生徒のコミュニケーションの量と質

質問紙の内容を次に示す。このうち，全体で50問から成る最後の質問（淡路・岡部式向性検査）は，調査そのものの性質からして，小学生には実施していない。

1 現在いっしよに住んでいる家族は，だれとだれですか。下のいちばん左のらんの，それぞれあてはまるところを○でかこみ，次のらんに名まえを書いてください。年令も職業も，わかれば書いてください。（現在いっしよにいない人は，書かないでください。）

○でかこむ	名　ま　え	年令	職　業
父			
母			
祖　父			

祖　　母			
兄1			
兄1 よ　め			
姉1			
姉1 む　こ			
兄2			
姉2			
弟1			
弟2			
妹1			
妹2			

2　あなたは，朝起きてから，おとうさんやおかあさんにあいさつしますか。あてはまるものを○でかこんでください。(以下同じです。)

ア　いつもする。　　イ　しないこともあるが，するほうが多い。

ウ　したり，しなかったり。　　エ　めったにしない。

オ　全然しない。

3　(あいさつをする人だけ)　なんと言って，あいさつをしますか。

……

4　あなたは，食事のはじめに，あいさつをしますか。

ア　いつもする。　　イ　しないこともあるが，するほうが多い。

ウ　したり，しなかったり。　　エ　めったにしない。

オ　全然しない。

5　(あいさつをする人だけ)　なんと言って，あいさつをしますか。

……

6　食事のおわりは，どうですか。

ア　いつもする。　　イ　しないこともあるが，するほうが多い。

ウ　したり，しなかったり。　　エ　めったにしない。

オ　全然しない。

7　（あいさつをする人だけ）　なんと言って，あいさつをしますか。

……

8　あなたは，夜ねるとき，おとうさんやおかあさんにあいさつをしますか。

ア　いつもする。　　イ　しないこともあるが，するほうが多い。

ウ　したり，しなかったり。　　エ　めったにしない。

オ　全然しない。

9　（あいさつをする人だけ）　なんと言って，あいさつをしますか。

……

10　家族のみなさんは，みんなで話をしながら食事をすることのほうが多いですか。それとも，あまり話をしないで食事をすることのほうが多いですか。

ア　みんなで話をしながら食事をすることが多い。

イ　あまり話をしないで食事をすることが多い。

ウ　どちらともいえない。

11　食事のときに，よく話すのは，だれですか。　……

あまり話さないのは，だれですか。　……

おもにどんなことが話題になりますか。　……

12　食事以外のときに，家族のかたが集まって，くつろいで雑談や世間話などをするようなことがありますか。

ア　よくある。　　イ　あまりない。　　ウ　ほとんどない。

13　そのようなときに，あなたは，よく話すほうですか。それとも，だまっているほうですか。

ア　よく話すほうだ。　イ　だまっているほうだ。　ウ　どちらともいえない。

14　家族の中で，よく話すのは，だれとだれですか。　……

あまり話さないで，聞くほうにまわっているのは，だれとだれですか。

……

おもにどんなことが話題になりますか。　……

15　あなたのおうちでは，なにかをきめるために，家族のかたがみんなで相談するようなことがありますか。

ア　ある。　　イ　ない。

16　（「ある」と答えた人だけ）　最近は，どんなことを相談しましたか。

……

17　あなたは，朝登校するとき，家族のかたにあいさつして，家を出ますか。

ア　いつもする。　　イ　しないこともあるが，するほうが多い。

ウ　したり，しなかったり。　　エ　めったにしない。

オ　全然しない

18（あいさつをする人だけ）なんと言って，あいさつをしますか。

……

19　学校から帰ったときは，どうですか。

ア　いつもする。　　イ　しないこともあるが，するほうが多い。

ウ　したりしなかったり。　　エ　めったにしない。

オ　全然しない。

20（あいさつをする人だけ）なんと言って，あいさつをしますか。

……

21　家族の中で，あなたがふだんいちばん多く話をする相手のかたは，だれですか。

……

その次に，あなたが多く話をする相手のかたは，だれですか。

……

反対に，話すことがいちばん少ないと思う相手のかたは，だれですか。

……

その次に，少ないと思う相手のかたは？　……

22　こまったことがあったとき，あなたは，ふつう，家族の中で，だれに最初に相談したいと思いますか。　……

23　あなたがおうちでご両親と食事をしているとき，ご両親に話しかけるばあいは，なんと言って呼びかけますか。

ア　おとっつあん	ア　おっかさん
イ　おとうちゃん	イ　かあちゃん
ウ　パパ	ウ　おかあさん
エ　おとうさん	エ　おかあちゃん
オ　とうちゃん	オ　おかあちゃま
カ　とうさん	カ　ママ
キ　パパさん	キ　おかあさま
ク　おとうさま	ク　ママさん
ケ　おとうちゃま	ケ　かあさん
コ　その他（　　）	コ　その他（　　）

24　おとうさんは，あなたといっしょに遊んでくれることがありますか。

ア　よくある。　　イ　ときどきある。　　ウ　ほとんどない。

25　（「ある」と答えた人だけ）　どんなことをして，遊んでくれますか。

……

26　おかあさんは，あなたといっしょに遊んでくれることがありますか。

ア　よくある。　　イ　ときどきある。　　ウ　ほとんどない。

27　（「ある」と答えた人だけ）　どんなことをして，遊んでくれますか。

……

28　あなたは，おとうさんといっしょに仕事をすることがありますか。

ア　よくある。　　イ　ときどきある。　　ウ　ほとんどない。

29　（「ある」と答えた人だけ）　いっしょにどんな仕事をしますか。

……

30　あなたは，おかあさんといっしょに仕事をすることがありますか。

ア　よくある。　　イ　ときどきある。　　ウ　ほとんどない。

31　（「ある」と答えた人だけ）　いっしょにどんな仕事をしますか。

……

32　家族の中で，あなたがいちばん話のしやすいと思う人は，だれですか。

……

反対に，家族の中で，いちばん話のしにくいと思う人は，だれですか。

……

33　あなたは，おとうさんと話をするのがすきですか。

ア　すきだ。　　イ　どちらかというと，すきなほうだ。

ウ　どちらともいえない。　　エ　どちらかというと，きらいなほうだ。

オ　きらいだ。

34　おかあさんと話をするのは，どうですか。

ア　すきだ。　　イ　どちらかというと，すきなほうだ。

ウ　どちらともいえない。　　エ　どちらかというと，きらいなほうだ。

オ　きらいだ。

35　おとうさんと話をするとき，ふつうあなたは，話すほうが多いですか。聞くほうが多いですか。

ア　話すほうが多い。　　イ　どちらかというと，話すほうが多い。

ウ　話すのと聞くのとが同じくらい。

エ　どちらかというと，聞くほうが多い。　　オ　聞くほうが非常に多い。

カ　わからない。

36　おかあさんと話をするときは，どうですか。

ア　話すほうが多い。　　イ　どちらかというと，話すほうが多い。

ウ　話すのと聞くのとが同じくらい。

エ　どちらかというと，聞くほうが多い。　　オ　聞くほうが非常に多い。

カ　わからない。

37　あなたは，おとうさんに聞いてもらいたい希望（きぼう）や意見があるとき，いつもそれをはっきりおとうさんに言いますか。

ア　言　　う。

イ　言わない。　○なぜですか。
- a.　おとうさんに話す機会がないから。
- b.　はずかしい気がするから。
- c.　なんとなく話しにくいから。
- d.　しかられるから。
- e.　その他（……）

ウ　希望や意見をもったことがない。

38　おかあさんに聞いてもらいたい希望や意見があるとき，いつもそれをはっきりおかあさんに言いますか。

ア　言　　う。

イ　言わない。　○なぜですか。
- a.　おかあさんに話す機会がないから。
- b.　はずかしい気がするから。
- c.　なんとなく話しにくいから。
- d.　しかられるから。
- e.　その他（……）

ウ　希望や意見をもったことがない。

39　あなたは，おうちの中で，だれかにしかられることがありますか。

ア　よくある。　　イ　ときどきある。　　ウ　ほとんどない。

40　（「ある」と答えた人だけ）　だれにしかられることが多いですか。

……

41　あなたは，おとうさんにしかられることがありますか。

ア　よくある。　　イ　ときどきある。　　ウ　ほとんどない。

42　（「ある」と答えた人だけ）　どんなことでしかられることが多いですか。

……

45　おかあさんにしかられることがありますか。

ア　よくある。　　イ　ときどきある。　　ウ　ほとんどない。

44 (「ある」と答えた人だけ)どんなことでしかられることが多いですか。

.....

45 先生から答案をかえしてもらいました。よく見ると，正しい答えなのにまちがいにされています。先生に言って，なおしてもらいたいと思います。こんなとき，あなたは，そのことを先生にすぐ言えるほうですか，それとも，言えないほうですか。

ア すぐ言えるほうだ。　　イ 言えないほうだ。

ウ わからない。　　エ その他（.....）

46 教室で，先生がみんなに質問をされました。それがあなたに答えられるようなものだったら，あなたは，どうしますか。

ア すぐ手をあげる。

イ 人が手をあげるのをみてから，手をあげる。

ウ 手をあげない。

エ わからない。

オ その他（.....）

47 ホームルームの時間などで，あなたは，みんなの前で自分の意見をのべるほうですか。それとも，だまっているほうですか。

ア いつも意見をのべるほうだ。

イ 意見をのべることが多いほうだ。

ウ だまっていることが多いほうだ。

エ いつもだまっているほうだ。

48 (「だまっていることが多いほうだ」または「いつもだまっているほうだ」と答えた人だけ) だまっているのは，なぜですか。

ア 意見がないから。

イ 意見はあるが，言うのがはずかしいから。

ウ その他（.....）

49 クラスの中で，よく意見をのべるのは，だれとだれですか。（氏名をはっきり書いてください。以下同じ。）

.....

だまっているのは，だれとだれですか。 .....

おもしろいことを言って，みんなを笑わせるのは，だれとだれですか。

.....

50 ひとりでバス（電車）に乗りました。切符(きっぷ)を買って，車掌(しゃしょう)さんからおつりをもらい

ましたが，10円たりません。車掌さんに言って，もらおうと思います。バスにはほかに人が乗っています。こんなとき，あなたは，そのことをすぐ車掌さんに言えるほうですか。

ア　すぐ言えるほうだ。

イ　言えないほうだ。

ウ　わからない。

オ　その他（……）

51　バス（電車）に乗りました。何人かの人が乗っています。向かい側の席にすわっている，見知らぬおばさんがハンカチを落としましたが，気がつかないでいます。こんなとき――

A　あなたは，そのおばさんに教えてあげたいと思いますか。

ア　そう思う。　　イ　そうは思わない。

B　あなたは，おばさんに教えてあげるのを，はずかしいと思いますか。

ア　はずかしいと思う。　　イ　はずかしいとは思わない。

C　あなたは，実際にそのおばさんに教えてあげますか。

ア　教えてあげる。　　イ　教えてあげない。

ウ　教えてあげたり，教えてあげなかったりする。　　エ　わからない。

52　あなたが尊敬している人をふたりだけ書いてください。

……

次にあげた質問に答えてください。質問どおりであれば，「はい」に○，その反対ならば，「いいえ」に○をつけてください。どちらにも決められないばあいは，そのままにしておいてください。

1	ちょっとしたことでも気になりますか。	はい	いいえ
2	すぐ決心がつきますか。	はい	いいえ
3	大事をとって，実行にてまどりますか。	はい	いいえ
4	決心をあとから変えることができますか。	はい	いいえ
5	思案するより活動するほうが好きですか。	はい	いいえ
6	陰気ですか。	はい	いいえ
7	失敗にこりますか。	はい	いいえ
8	のんきですか。	はい	いいえ
9	無口ですか。	はい	いいえ

10	感情をすぐおもてに現わしますか。	はい	いいえ
11	よくはしゃぎますか。	はい	いいえ
12	気が変わりやすいですか。	はい	いいえ
13	物事にこり固まりますか。	はい	いいえ
14	しんぼう強いですか。	はい	いいえ
15	りくつっぽいですか。	はい	いいえ
16	議論が過激になりやすいですか。	はい	いいえ
17	用心深いですか。	はい	いいえ
18	動作がきびきびしていますか。	はい	いいえ
19	仕事が綿密ですか。	はい	いいえ
20	派手な仕事が好きですか。	はい	いいえ
21	仕事に夢中になりますか。	はい	いいえ
22	空想家ですか。	はい	いいえ
23	潔癖(けつぺき)すぎますか。	はい	いいえ
24	持ち物をなげやりにしますか。	はい	いいえ
25	むだ使いが多いですか。	はい	いいえ
26	話し好きですか。	はい	いいえ
27	気むずかしやですか。	はい	いいえ
28	じょうだんを言いますか。	はい	いいえ
29	おだてられやすいですか。	はい	いいえ
30	強情ですか。	はい	いいえ
31	不満が多いですか。	はい	いいえ
32	自分の評判が気にかかりますか。	はい	いいえ
33	他人の批判がしたいですか。	はい	いいえ
34	自分のことを他人にまかせられますか。	はい	いいえ
35	人から指図されるのがいやですか。	はい	いいえ
36	人の上に立って，うまく治めてゆくことができますか。	はい	いいえ
37	他人の意見をすなおに聞き入れますか。	はい	いいえ
38	よく気がききますか。	はい	いいえ
39	かくし立てをしますか。	はい	いいえ
40	他人にすぐ同情をしますか。	はい	いいえ

41	他人を信じすぎますか。	はい	いいえ
42	うらみが忘れられないですか。	はい	いいえ
43	はにかみ屋ですか。	はい	いいえ
44	ひとりぼっちでいるのが好きですか。	はい	いいえ
45	友だちを作るのに骨がおれますか。	はい	いいえ
46	人前で平気で話せますか。	はい	いいえ
47	人目につくところでは，いつも引込んでいますか。	はい	いいえ
48	意見の違う人とでも気軽につき合ってゆけますか。	はい	いいえ
49	世話好きですか。	はい	いいえ
50	おしまずに物を与えますか。	はい	いいえ

C 対　　象

都市と農村の児童生徒。計2142名。

1. 都市——福島市	男	女	計
福島市立第1小学校5年生全員	100	72	172
〃 杉妻小学校 〃 〃	67	50	117
〃 清沢小学校 〃 〃	20	13	33
〃 第1中学校2年生全員	254	222	476
福島県立福島高等学校2年生3クラス	156	0	156
〃 福島女子高等学校2年生3クラス	0	153	153
2. 農村——福島県伊達郡梁川町			
梁川町立梁川小学校5年生全員	97	84	181
〃 粟野小学校 〃 〃	43	37	80
〃 五十沢小学校〃 〃	24	22	46
〃 梁川中学校2年生全員	246	226	472
福島県立梁川高等学校2年生全員	70	186	256
計	1077	1065	2142

D 調査の実施

調査は，昭和39年11月9日から13日までの間に学校別・クラス別に実施し

た。

E 担　当　者

言語効果研究室に所属する林四郎・高橋太郎・渡辺友左の共同研究であるが，渡辺が主として担当した。研究補助員屋久茂子が作業をたすけた。

E 整　　理

調査結果の集計整理の作業は，現在進行中である。整理された結果については，昭和38年度国民各層の言語生活の実態調査のための委員会が島根県松江市で行なった調査の一つである生徒調査の結果とあわせて，次年度にくわしく報告する予定である。

（渡　辺）

明治時代語の調査研究

A　目　的・意　義

近代語研究室では，昭和30年度以来，明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行なってきた。その成果については，そのつど年報または報告書に発表されている。(『年報』7～15，および『明治初期の新聞の用語―報告15―』参照)

本年度からは，その語彙調査で得られた資料により分析考察すべき問題のうち残されたものについて，一往のまとめをし，また，できるだけ早い機会に，新しい構想による調査研究にも従事しうるようにと考えた。このようにして，前年度からの継続の仕事を含め，立てられた作業の柱は，次の四つである。

(1)　明治初期文献の用字調査

(2)　明治初期文献における助詞・助動詞の調査研究

(3)　明治初期文献に現われた語彙の用例記載カードの作成

(4)　明治初期生まれの古老の談話の録音採集

B　担　当　者

(1)については進藤咲子，(2)(3)(4)については永野賢が担当し，研究補助員中曽根仁・長尾紀子（5月まで）・牧野正子（6月から）がそれぞれの仕事に参加したほか，2名の臨時補助者が随時作業を助けた。

C　本年度の作業と成果，今後の予定

(2)については，『交易問答』と『安愚楽鍋』とから採集された助詞延べ約1万語，助動詞延べ約2,000語を得ているが，なお新たに他の文献から2～3万語を補充すべく，用例収集の準備作業をしたにとどまる。引き続き次年度も行なう予定である。

(3)については，昨年度の用例記載のしかた（『年報』15参照）と方法を変えて，用例の多少にかかわらず，五十音順に配列されている語の順にカードを作成し，その結果約1,500語の用例について記載を完了した。次年度も引き続いて

行なう。

(4)については，昭和40年3月8～13日の間，永野が山口県（山口市・萩市）に出張し，次の方がたのお話を伺い，延べ約8時間分の談話を録音採集した。

○倉光百合蔵さん（明治6年生，91歳．元教員，旧士族）

○大田つるさん（8，89．旧士族）

○信国正一さん（17，80．元軍人，旧士族）

○河野通毅さん（18，80．元教員，旧士族）

○河野としさん（23，75．通毅氏夫人，旧士族）

○渡辺迪知さん（21，76．旧士族）

○山下恵方さん（13，84．僧）

○山下ウメカさん（24，73．恵方氏夫人）

○徳田猛博さん（14，83．農業）

○篠原長熊さん（19，78．農業）

○森重文作さん（17，80．商業）

○藤井順八さん（21，76．商業）

なお，この仕事には，山口大学助教授岡田岩吉氏，山口市立宮野小学校教諭佐方嘉彦氏，同市立大殿小学校教諭松原三夫氏らのご協力をえた。次年度は，東京・伊勢・松江で録音採集する予定である。

(1)については，次項に報告する。　　（永　野）

D　明治初期文献の用字調査

この用字調査は，つぎの資料における用語の表記を調査対象とする。

1　郵便報知新聞の用語

明治10年11月～11年10月までの一年間の新聞について，抽出比$\frac{1}{12}$の無作為抽出法によって得た語彙

異なり語数　28364　　延べ語数　99384

2　郵便報知新聞主観採集による用語

1の語彙にさらに補充するために，主観的に語彙を採集したもの

異なり語数　8616

3　学術・論説的文献の用語

明治1～20年に刊行された学術・論説的文献22種（55冊）の用語を調査したもの

異なり語数　15436

4　小新聞（読売新聞・東京絵入新聞）の用語

明治11年7月～12年6月まで一年間について，抽出比$\frac{1}{35}$の無作為抽出法によって得た語彙

異なり語数　8049

5　安愚楽鍋　明治4年刊　仮名垣魯文著

全数調査を行なってある。

異なり語数　4131　　延べ語数　10019

6　交易問答　明治2年刊　加藤弘之著

全数調査を行なってある。

異なり語数　934　　延べ語数　4729

以上の調査対象から得られるものは，つぎのものである。

Ⅰ　漢字の異なり字数，延べ字数（延べは，郵便報知新聞の用語のみとする）

Ⅱ　用字法（語の書きあらわし方）一覧

Ⅲ　漢字表記にゆれのある語の一覧（例　権利：権理　　演説：演舌）

Ⅳ　かな書きの語，かなと漢字のまぜ書きの語の一覧

Ⅴ　漢字で表記してある外国語の一覧

これらのうち，第一に着手した「郵便報知新聞の用語」についての用字調査は，用語の使用度数が10以上のものと9以下のものとに分けて行なった。使用度数10以上の語というのは，異なり語数で1280，延べ語数では49710を占める語群である（「郵便報知新聞の用語」の総数は，異なり語数28364，延べ語数99384である）。

この10以上の語は，語種別にみると，その分布はつぎのようになる。

	異なり語数		延べ語数	
	%	実数	%	実数
和　語	48.0	614	63.5	31564
漢　語	42.4	542	26.5	13157
混種語	6.4	82	0.1	3032
外来語	0.0	1	0.1	39
人名・地名・数詞	3.2	41	3.8	1918

このような語種分布を示す用語について，その語を書き表わす漢字に注目して，漢字の異なり字数，延べ字数，および，字音ないし訓・特訓（例：明日<あす>，等閑<なほざり>）に読まれた漢字の分布の状況を調査したところ，つぎのようになった。

異なり字数	1139	（俗字，略字，異体字を含む）
延べ字数	64692	
音	31871	(49.3%)
訓	31689	(49.0%)
特訓	1132	(1.7%)

先に示した語種分布の延べ語数をみると，和語は漢語より圧倒的に多いのだから，かりに，すべての和語に漢字が当てられるとすれば，訓に読まれる漢字はもっと多くてもよいと思われる。しかし，実際には音と訓との分布は，ほぼ同数である。このことは，少し乱暴な言い方をすれば，漢語は漢字2字の結びつきで構成されるものが多いからではないか，これに対して和語は一字で一語を表わすものが多いからではないか，あるいは，和語にはかな書きの語が多いからではないかなどと想像される。この調査は，使用度数10以上の語の調査であり，和語が漢語より多いという語群についての調査であるが，漢語が和語よりも多いという結果を得ている使用度数9以下の語群では，字音で読む漢字は，はるかに多くなるだろうと推定される。

今述べた使用度数10以上の語の用字調査について，使用度数の高い漢字若干を，その用例とともにあげて示すことにする。

使用度数の高い漢字

使用度数順に第30位までの漢字について，順位，度数，音訓ごとの使用例を以下の表に示す。

注　意

1　漢字見出しの右肩の印は，次の区分を示す。

＊　教育漢字

◦　教育外当用漢字

°× 当用漢字補正案で削られる候補

無印 表外漢字

2 〔順位〕は国立国語研究所報告22『現代雑誌九十種の用語用字』第二分冊漢字表での順位を示す。

3 〈順位〉は，大西雅雄氏の『日本基本漢字』（後述）の順位を示す。

2・3は，参考までに掲げたものである。

4 用例の中の，かたかなルビは任意に読みを附したもの，平がなルビは原本に附されていたものである。

其（き） 順位1 度数1721 音— 訓1721(100%) 特訓— 〔順位1579〕〈順位27〉

用例

訓 其（ソノ）1535 其の148 其方16 其（ソレ）3 其れ5 其れ13(副) 其々（ソレゾレ）1

かな書き その5 ソノ8 それ2 ソレ3 ソレ1(副)

日（じつ・にち）* 順位2 度数1277 音778 (60.9%) 訓463 (36.3%) 特訓36 (2.8) 〔順位5〕〈順位9〉

用例

音 一日（ジツ）27 一昨日40 過日11 近日24 前日16 他日12 當日20 同日15 不日14 本日50 両日12 一日（ニチ）29 今日95 三十日33 三十一日13 卅一日6 卅日2 十一日26 十二日26 十三日16 十五日26 十六日21 十七日32 十八日23 十九日21 日夜10 日本8 日本人10 明日12

訓 月日（と）10 日116 日々20 二日（か）31 三日41 四日28 五日20 六日22 七日22 八日23 九日21 十日36 十四日31 二十日10 廿日16 廿日（はつか）1

特 明日（あす）1 昨日（きのう）1 今日（きょう）21 頃日（このごろ）1 朔日（ついたち）1 一日（ツイタチ）11

一（いち・いつ）* 順位3 度数1085 音912(84.1%) 訓150(13.8%) 特訓23(2.1%) 〔順位1〕〈順位1〉

用例

音 一22 一々13 一圓66 一ケ年10 一箇9 一個2 一國15 一切16 一切（いっさい）1 一昨43 一昨日40 一時41 一時11(数) 一日（ジツ）27 一種13 一升8 一層14 一層（そう）1 一旦17 一旦（いったん）1 一丁目18 一度11 一同36 一日（ニチ）29 一人41 一年12 一般49 一方11 一枚17 一名14 三十一日13 卅一日6 十一月36 十一時13 十一日26 十一年104 第

一24　第一大區11　第一號7　第一号6　第一條21　同一10　二十一日3　廿一日17
今西相一11(人名)

訓　一(ヒトツ)102　一つ12　一とつ3　一人(り)24　一人り9

特　一寸(チロツト)8　一日(ツイタチ)11　一層(ひときわ)1　一個(ひとつ)1　一名(ひとり)1　一個(ひとり)1

事(じ)*　順位 4　度数964　音312(32.4%)　訓652(67.6%)　特訓一　〔順位29〕〈順位3〉

用例

音　記事16　議事13　事業27　事件19　事故11　事實16　事情19　事物12　事務33　従事す29　従事す(じゅうじ)1　東京府知事13　判事38　府知事12　録事53

訓　事625　事(こと)2　事共(ことども)8　事共3　事とも1　何事12　何に事1

かな書き　コト11　こと6　ヿ340　ヒ208

此(し)　順位 5　度数951　音一　訓908(95.5%)　特訓43(4.5%)　〔順位1358.5〕〈順位233〉

用例

訓　此(ココ)27　此(こゝ)3　此に4　此に於て4　於此3　於此乎1　此(コノ)589　此(この)3　此の99　此(こ)の1　此の如し15　如此4　如此し1　此の如く(んば)2　此頃38　此の頃1　此度21　此程50　此(コレ)11(代)　此れ7(代)　此れ6(副)　此等17　此ら1

特　此所8　此所(ここ)2　此處7　此處(こゝ)9　此方(コヤ)1　此方(コナタ)10　此方(こなた)6

かな書き　コヽ10　こゝ2　コヽニ1　こゝに2(副)　コノ13　この3(連)　こなた1

人(じん)(にん)*　順位 6　度数919　音596(64.9%)　訓241(26.2%)　特訓82(8.9%)　〔順位2〕〈順位2〉

用例

音　外人(ジン)24　軍人11　原告人11　吾人13　主人9　人員20　人家12　人口10　人心20　人生10　人物11　人民175　人力車10　世人33　代議人14　代人11　同人15　日本人10　婦人14　一人(ニン)41　壹人2　三人23　商人11　他人11　本人27　四人19　両人14　六人15

訓　人219　人々22

特　主人(あるじ)1　良人(おつと)1　良人(をつと)1　一人(ヒトリ)24　一人り9　二人(フタリ)30　二人り16

十(じゅう)*　順位 7　度数832　音796(95.7%)　訓36(4.3%)　特訓一　〔順位8〕〈順位21〉

用例

音　五十錢34　三十分13　三十日33　三十一日13　十11　十五日26　十三日16　十七日32　十二月49　十二時15　十二日26　十八日23　十四日31　十六日21　十圓18　十月40　十時23　十年99　十一月36　十一時13　十一日26　十一年104　十九日21　十錢(ジッセン)11　二十

日10　二十二日4　二十四日4　二十八日2　二十九日1　二十錢7　二十七日2　二十三日4　二十五日7　二十五錢7　二十一日3　二十六日2　十分(ブン)9

訓　十日(トオカ)36

之(し)　順位 8　度数791　音一　訓791(100%)　特一〔順位581〕〈順位33〉

用例

訓　之(コノ)1(連)　之(コレ)662(代)　之れ125(代)　之1(副)　之れ2(副)

かな書き　コレ17(代)　これ12(代)　コレ5(副)

同(どう)*　順位 9　〔度数〕711　音656(92.3%)　訓55(7.8%)　特訓一〔順位59〕〈順位73〉

用例

音　一同36　同421　同意す11　同一10　同國11　同氏10　同日15　同所54　同村13　同斷11　同人15　同年12　同様37

訓　同(オナジ)1　同し29　同じ8　同く6　同ふ11

者*　順位 10　度数703　音49(7.0%)　訓653(92.9%)　特訓1(0.1%)〔順位31〕〈順位28〉

用例

音　患者18　記者14　論者17

訓　者651　者(もの)2

特　昔者(ひかし)1

かな書き　もの(者・物)426

所*　順位11　度数629　音232(36.9%)　訓323(51.4%)　特訓74(11.8%)〔順位75〕〈順位23〉

用例

音　行在所10　各所11　近所13　區務所18　警察所3　裁判所26　地所11　所爲10　所業1　所行2　所持12　所有16　同所54　東京裁判所14　場所23

訓　所(トコロ)322　所ろ1

特　所謂(いわゆる)21　所謂(いわゆ)2　所謂る1　此所(ココ)8　此所(ここ)2　所以(ニヨリ)39　所以(わけ)1

かな書き　トコロ2　ココ(「此」参照)

月*　順位12　度数567　音534(94.2%)　訓33(5.8%)　特訓一〔順位43〕〈順位59〉

用例

音　去月(キヨクゲツ)26　九月45　五月35　三月37　四月29　七月50　十月40　十一月36　十二月49　二月45　八月24　本月74　六月44

訓　月10　月日10　年月13

今*　順位13　度数549　音285(52.0%)　訓243(44.2%)　特訓21(3.8%)〔順位47〕〈順位20〉

用例

音　現今18　今度59　今日95　今般52　昨今42　自今19

訓　今121　今ま5　今36(副)　今ま1(副)　今に10　于今1　今や16　唯今7　只今5　今西30(人名)　今西相一11(人名)

特　今日18　今日(きやふ(正けふ))1　今日(きやう)1　今日(きよう)1

かな書き　いま1

年*　順位14　度数514　音480(93.4%)　訓34(6.6%)　特訓一〔順位11〕〈順位29〉

用例

音　一年12　一ケ年10　九年34　昨年45　七年17　十年99　十一年104　先年14　當年10　同年12　年金16　八年30　本年59　六年18

訓　年34

出*　順位15　度数468　音137(29.3%)　訓331(70.7%)　特訓一〔順位6〕〈順位6〉

用例

音　出火14　出願す19　出願(候)2　出立す11　出張17　出張す21　出帆す12　出品21　派出10　輸出10

訓　出す24　出たす1　出つ31　出づ5　出る19　出(ず・たる)21　出(ず)1　出つ　伺出9　伺ひ出て1　差出す40　差出(て)18　指出(て)1　出す23　出る18　出来る19　届出(可・候・て)31　届出で1　届け出(ん・べし)2　取出す7　取り出す4　取り出す1　取り出す1　願出(たる)10　願出つ1　願い出る2　願い出(たる)8　願い出て1　申出(たり)14　申出で1　呼出し9　呼び出し1　呼出1　呼ひ出す1　呼び出す1

國*　順位16　度数466　音390(83.7%)　訓75(16.1%)　特訓1(2.1%)〔順位36〕〈順位15〉

用例

音　一國15　英國67　外國12　外國新報11　各國27　國家29　國民10　諸國13　清國17　全國16　同國11　土國15　内國20　佛國52　米國29　両國13　魯國33

訓　國75

特　英國1

又(ゆう)× 順位17 度数442 音— 訓442(100%) 特訓— 〔順位657〕〈順位96〉

用例

訓 又(マタ)259(接) 又た17(接) 又は56(接) 又(マタ)84(副) 又た9(副) 又も17(副)

かな書き マタ1 また3(副) また8(接)

云(うん) 順位18 度数441 音62(14.1%) 訓379(85.9%) 特訓— 〔順位190〕〈順位101〉

用例

音 云々62

訓 云ふ306 云65 云つ(て)2 云はんや1 云はく4 云(イワク)1

かな書き いう89 イフ5

以(い)* 順位19 度数439 音214(48.8%) 訓185(42.1%) 特訓40(9.1%) 〔順位140〕〈順位69〉

用例

音 以下66 以後15 以後(いご)1 以后1 以上65 以前18 以来49

訓 以3 以て145(接) 以す13 以てす33

特 所以39 所以(ワケ)1

時(じ)* 順位20 度数438 音269(61.4%) 訓162(37.0%) 特訓7(1.6%) 〔順位23〕〈順位18〉

用例

音 一時52 九時14 現時12 三時11 暫時10 十時23 十一時13 十二時15 第九時10 當時48 二時17 八時26 四時18

訓 時162

特 何時(イツ)3 暫時(しばし)3 暫時(しばし)1

かな書き いつ12 トキ68 トキ1 とき13

二(に)* 順位21 度数397 音309(77.8%) 訓78(19.7%) 特訓10(2.5%) 〔順位3〕〈順位16〉

用例

音 二圓22 二月45 二時17 二丁目24 十二時15 十二日26 十二月49 二十錢7 二十一日3 二十二日4 廿二日16 二十三日4 二十四日4 二十五日7 二十六日2 二十七日2 二十八日2 二十九日1 二十五錢7 第二20 氷二1 第二號9 第二号4 第二條18

訓 二タ度1 二人30 二人り16 二日(フツカ)31

特　二十日(はつか)10

得(とく)*　順位22　度数385　音一　訓385(100%)　特訓一　〔順位251.5〕〈順位95〉

用例

訓　相心得(たり)20　得(カ)334　得(エ)2　心得13　心得(たり)16

金(きん)*　順位23　度数383　音338(88.3%)　訓45(11.7%)　〔順位60〕〈順位140〉

用例

音　金226　金(金属)14　金額33　金子(きす)10　金銭13　金高11　年金16　罰金15

訓　金(かね)45

及(きゅう)°　順位24　度数375　音一　訓375(100%)　特訓一　〔順位627〕〈順位223〉

用例

訓　及ぶ81　及ぶ16　及ん(て)12　及21　可及9(以上動詞)　及び159　及び19　及58(以上接続詞)

かな書き　およぶ1

至(し)*　順位25　度数373　音20(5.4%)　訓353(94.6%)　特訓一　〔順位849〕〈順位304〉

用例

音　至急10　至極10

訓　至ル210　至る99　至19　至(テ)8　至(て)2　至る(いたる)2　至て8(副)　至テ3(副)　至つて3(副)

付(ふ)*　順位26　度数356　音15(4.2%)　訓341(95.8%)　特訓一　〔順位291.5〕〈順位402〉

用例

音　付す9　付與す5　(可)付與1

訓　仰付(ツケ)(たり)12　仰せ付(たり)1　付(ツキ)244　付き20　付(ツキ)(て)29　付く2　付(ツケ)(て)3　名付く2　申付(ツケ)(たり)22　申付る6

かな書き　つく3

大(たいだい)*　順位27　度数348　音148(42.5%)　訓200(57.5%)　特訓一　〔順位4〕〈順位4〉

用例

音　大(ダイ)83　盛大14　第一大區10　第壹大區1　大警視17　大小17　大書記官1　大臣11　大統領20　大頭領2　陸軍大尉11

訓　大(おオイ)に113　大ひに4　大坂24　大阪1　大藏卿8　大藏省27　大率2　大隈重信11(人名)

是(ぜ)　順位28　度数343　音一　訓343(100%)　特訓一　〔順位1514〕〈順位77〉

用例

訓　是1(代)　是に於て22　於是(乎)7　是の12(連)　是7(連)　是れ79(副)　是(コレ)30(副)　是(こ)れ

1(副)　是等6　是れ等3　是(コレ)も136(代)　是れ35(代)　是(これ)1(代)　是れ1(代)　如是2

かな書き　「之」参照

地(ち・じ)*　順位29　度数339　音339(100%)　訓—　特訓—〔順位53〕〈順位36〉

用例

音　地(チ)160　位地6　各地11　實地11　地位15　地租22　地方29　地方官10　地方税19　土地23　内地16　地所12

何(か)*　順位30　度数332　音—　訓228(69.0%)　特訓104(31.0%)〔順位57〕〈順位12〉

用例

訓　何(ナニ)32　何に10　何か6　何にか8　何乎1　何事12　何に事1　何分15　何程10　何(カン)19　何ん5　何ぞ10　何そ22　何んそ1　何等16　何となれは11　何んとなれば1　何んとなれは2　何レ41　何(イズレ)4　何れ1

特　如何7　如何が1　如何(いかゝ)2　如何(いかが)1　如何ナリ19　如何なる4　如何なり8　如何(イカニ)28　如何(いか)に1　如何ニ8　如何ニモ5　如何にも4　如何ん12　何時3　何禮(イズレ)1

かな書き　いかゞ1　いかなる1　いかに1　いかにも3　いつ12　いづれ1

以上，30位までの漢字の順位は，使用度数9以下の語の用字を加えることによって，かなり動いてくるだろうと思うけれども，この表で見られた二三のことについて，簡単に記述しておくことにする。

1　字音に読まれることの多かった漢字と，訓に読まれることの多かった漢字

字音に読まれた字……地

字音に読まれることの多かった字……日　一　人　十　同　月　年　國　時　二　金

訓に読まれた字……其　此　之　又　得　及　是　何

訓に読まれることの多かった字……事　者　所　出　云　至　付

字音と訓が半々（20%以内の開き）……今　以　大

2　(A)　語を書き表わす要素として，幾種類もの語に幅広く使われる漢字

(B)　語を書き表わす要素として幅広く使われることはないが，その文字で表記されるある語の使用度数が高いために，その文字の使用度数が高くなっている漢字

これを知るために，先の表から，ある漢字を表記要素とする語がどのぐらいあるかを調べることにした。語の数え方は，たとえば，<一人>と<壹人>は一語としたが，<大統領>と<大頭領>は二語として数えた。人名は除外した。

字	音	訓	特	字	音	訓	特	字	音	訓	特
其	—	5	—	所	15	1	4	二	22	3	1
日	29	15	6	月	13	3	—	得	—	3	—
一	40	2	6	今	6	5	1	金	8	1	—
事	14	3	—	年	14	1	—	及	—	2	—
此	—	10	4	出	9	13	—	至	2	2	—
人	28	2	4	國	17	1	1	付	2	5	—
十	37	1	—	又	—	2	—	大	10	5	—
之	—	3	—	云	1	3	—	是	—	8	—
同	13	2	—	以	6	2	2	地	12	—	—
者	3	1	1	時	13	1	3	何	—	10	7

漢字は，音・訓両様の読みを持つものが多いから，さきに記したように，(A)と(B)に分けても，ある字の音は(A)に，訓は(B)に該当するということは，しばしば起こる。この調査では，音に読まれた時の文字の働きと，訓に読まれた時の働きとは一往別のものとして扱っておく。

この表によれば，音に読まれる漢字は，訓に読まれる漢字よりも，幾種類かの語を書き表わすのに用いられることが多い。熟語の表記要素として用いられることが多いわけである。これに対して，訓に読まれる漢字は，どちらかといえば，その漢字一字で訓読みの語に用いられることが多い。

この表と，先の30位までの漢字の表とを合せて見ながら，(A)ないし(B)に該当する漢字を選び出してみよう。

(A)に該当する漢字は，日　出（以上音・訓とも），一　事　人　十　同　所　月　年　國　時　二　大　地(以上音)，此（訓）である。(B)に該当する漢字は，其（その），一（ひとつ），事（こと），人（ひと，人民），之（これ），者(もの)，所(ところ)，今(いま，今日)，國(くに)，又(また，または)，云(云々，いう)，以(もって)，時(とき)，得(う)，金(きん，かね)，

及(およぶ，および)，至(いたる)，付(つき)，大(おいいに)，是(これ)，地(ち)などがそれである。

(A)ないし(B)に分類することは，現代までの文字およびそれによって表記される語の変遷を見る上では，必要なことと思われる。その文字がある語基を表記している場合に，その語基による造語力が今もなお，盛んであるかどうか。当時ある漢字の使用度数を高からしめている語が，今日もなお盛んに用いられているかどうか。もし今日では別の語と交替したとか，消滅したとかすれば，それはどういう理由に拠るか。たとえば，硬い文体の衰退によって，得(う)とか至(いたる)（～ヨリ～ニ至ル，自～至のように使われた）の使用度数が少なくなったと推測されるのである。また，慣用的表記の時代的推移といったことも変化の要因として考えられる。これは，自然的な推移よりも，人為的なものによる変化が多いと考えられる。このような事がらについて，詳しく調査したいと考えるので，その手がかりをつかむ上で必要な調査だと思うのである。

3　先に，30位までの表に参考までに示した『現代雑誌九十種の用字用語』および『日本基本漢字』の順位と，われわれが調査した30位までの文字とをくらべてみよう。

当時から現代までの距離は約90年で，その間，とくに終戦後は当用漢字や音訓表の制定があり，漢字で書かれた語が，かなで書かれるようになったり，語の言い替え，漢字の差し替えなどが行なわれている。であるから，人為的な変化の面について，当時と現代とをくらべるのはあまり意味がないように思う。幸い，文字改革以前の漢字調査には，昭和16年に刊行された大西雅雄氏の『日本基本漢字』があるので，たいへん参考になる。ちなみに，大西氏の調査は，教科書，文学書，新聞雑誌を始め，広い分野にわたって，延べ80万字の調査から順位づけられたものである。ところで，『現代雑誌九十種の用語用字』の漢字の順位をみると，われわれが調査した30位までの漢字は，1位から1579位までの間に散在しており，『日本基本漢字』では，1位から402位までの間にある。当用漢字表にない漢字<其　此　之　云>，訓の認められていない漢字<是　以>が，『現代雑誌九十種の用語用字』で使

用度数の少ないことは当然のことと思われる。<云>は例外である。『日本基本漢字』では，これらの文字は，比較的上位に位置している。だが，<此>が233位，<云>が101位で，これらの字の中ではやや低い所にある。しかし，このような人為的な面（もちろん，人為的な理由ばかりとは言いきれないが）の制約からその文字の使用度数が減少したとしても，その文字を用いて表記されていた語の使用度数は，今日も依然として高いというものが多い。語を書き表わすには，いくつかの書き表わし方があるのだから，時代の影響などを受けて，文字の面では違いが出てくるわけである。

『現代雑誌九十種の用語用字』には，字ごとにその用例が出ているから，これと，われわれの調査の用例とを見て変遷の要因について考えることも必要である。

なお，これらの外にも，文字自身に関することでは，字体がどう変遷したか，外国語音をどう書き表わしたかといった問題，あるいは，漢字の組み合わせによって漢語が書き表わされることが多いけれども，現在では，その漢語の表記から，漢字一字一字の意味を推察することができないほど語としても熟合の度合いが強く，従って，ある漢字が本来持っている意味から掛け離れてしまっているものがあるのだが，漢字の意味や用法が明治以降どう推移したろうかといった問題，また，ある語を書き表わすのに二通り以上の書き方のある場合には，その消長の実情はどうかといった問題など，調査したい事がらは，いくつもある。

このように，変遷という観点から追及することは，当時の実態を調査することと同様に，大切なことと考える。しかし，史的に見るためには，当時から現代まで90年間について，着実に変遷のあとをたどることが望ましく，われわれのへやでも，現代に至るまでの用語・用字・文体の調査を行なう構想を持っている。であるから，このような構想が現実に具体化されれば，かなり，たしかに，変化の要因について考察することもできるはずである。今は，それが不可能であるから，調査規模がたいへん大きいし，また時代も90年近く違うけれども『現代雑誌九十種の用語用字』の調査と，当時の調査を見比べておいて，将来の調査に備えたいと考えているのである。

なお，次年度は，使用度数９以下の語の用字調査とこの使用度数10以上の語の用字調査を合わせて，郵便報知新聞のサンプル調査だけの漢字表を作成する予定である。

（進　藤）

現代敬語の調査研究

A 目的と意義

近年，敬語をめぐる，さまざまな論議が見られるが，その根底には，敬語に対する意識が，各人によって，かなりずれているということがあると推定される。たとえば，比較的高い年齢層の人びとから，現代の若い人の敬語が乱れているというような批判が，しばしば出されるが，これなども，年代の間の敬語意識の違いが，その原因の一つに数えられる。この調査研究は，こうした敬語意識のずれが，はたして，どの程度あるのか，また，どのような形で，それが存在しているのかを実際の敬語使用の状態との関係も注意しつつたしかめるとともに，それらが年齢・性・職業・教養等の条件とどのような関係にあるかについても明らかにしていくことを目的とする。

個々の敬語をとり上げて，それについての意識を調べるようなことも含めて，敬語についての意識・意見を明らかにしようとしたこの研究は，東京および，奈良市・高松市・大田原市(栃木県)において調査を実施し，敬語および敬語意識についての各地域の実情を観察するとともに，現代の，主として共通語の敬語表現の問題点を明らかにすることを目ざした。

大田原市周辺は，いわゆる無敬語地帯に属し，敬語意識に関する問題ばかりでなく，敬語の習得においても，特殊な事情が考えられる。そこで，この地域においては，特に，面接あるいは録音などによって，敬語行動の実情をとらえることにつとめた。

なお，今回の敬語調査は，昭和27，28の両年度に実施した「敬語と敬語意識」（国立国語研究所報告11，昭32・3刊）の研究を，全般にわたって参考にし，調査項目についても，共通ないしは，同類のものを，数多くとり入れた。調査地点や調査規模等が異なる点には，充分注意する必要はあるが，結果の比較もある程度可能であるように配慮した。

B 担　当　者

この調査研究の担当者は，つぎの通りである。

松　尾　　拾　（第4研究部長）

飯　豊　毅　一　（第2資料研究室長）

田　中　章　夫　（第1資料研究室）

また，研究補助員露峰裕子・河東はるみの2名が，作業に従事した。

C　研究の経過

今回の「現代敬語の調査研究」は，現代の敬語についての，当面の問題点を，昭和39年度一年間で，整理するという目標で開始したものであり，その内容は，つぎの4項目の調査に分かれている。このうち，年度の前半には，①②の調査研究に重点を置き，年度後半は③④に力を注いだ。

①　文献資料による敬語問題の調査

主として，終戦後の文献資料において論じられた敬語に関する意見あるいは，問題にされた敬語表現などを調査し，項目別にカードに整理した。

そのさい使用した文献資料は，単行本のほか，つぎのようなものも含む。

国立国語研究所第2資料研究室作成の「国語関係新聞記事切り抜き帳」

ＮＨＫ放送文化研究所編集の「文研月報」

筑摩書房発行の雑誌「言語生活」

以上のほか，「国語年鑑」（国立国語研究所編）の「展望」欄，雑誌「国語学」（国語学会編）・「国文学」（学燈社）・「解釈と鑑賞」（至文堂）・「国語と国文学」（至文堂）・「言語と文芸」（大修館）等からも，資料を採集した。

②　現代敬語の表現上の問題点の調査研究

敬語法についての各種文献を参考にしつつ，おもに，研究担当者の内省により，いわゆる敬語の誤用といわれる表現をはじめ，問題になる敬語表現をとりあげて，その表現価値，敬語の段階，場面との関係などを分析し，現代敬語の表現上の問題点を整理した。このほか，種々の場面における敬語表現形式の選択の問題，あるいは商業方面の接客敬語の問題なども扱った。そのさい，具体的な資料としては，「シナリオ年鑑」(1959年度版～63年度版・ダヴィッド社刊)に収録されているシナリオや，雑誌「言語生活」の「録音器」欄を使用した。

③ アンケート調査の実施

上に述べた「文献資料による敬語問題の調査」および「現代敬語の表現上の問題点の調査研究」から出て来た種々の問題をつぎの4項目に整理して，アンケート調査の調査項目を設定した。

a　敬語についての一般的意見

b　ある条件での敬語についての意見

c　敬語表現についての意見

d　ある場面での敬語表現の選択意識

dの「ある場面での敬語表現の選択意識」については，選択肢法と「あなたなら，どう言うか」すなわち，「実際に言うつもりの表現形式を記入させる方法」とを用い，選択肢法に20問，記入法に10問の質問を用意し，他のa・b・cについては，各10問ずつ全体で50問を用意した。そのさい，実際の質問文の形式，あるいは，場面や条件の設定等については，さきに述べた「敬語と敬語意識」での調査を参考とした。また，質問項目の一部には，「敬語と敬語意識」での質問項目と同一ないしは類似のものを用意した。

調査票はそれぞれ40問ずつからなる甲・乙・丙の三種とした。そのうち20問は三種に共通であるが，他の20問は種類によって異なる。調査においては，この三種の調査票が，かたよって配布されないように配慮した。

東京以外の調査地点としては，調査の便宜が得やすいということをも考慮して，奈良市・高松市・大田原市を選んだ。

このアンケート調査は，昭和39年12月から，40年1月にかけて実施したもので，調査の対象は，成年（20歳以上）男女とし，各地点とも，主として大学・高校・中学の学生・生徒を通じて，その父兄・親戚・知人などを被調査者として依頼し，調査票に記入してもらった。この際，年代にいちじるしいかたよりが生じないように配慮を加えた。また，別に一部は，担当者自身が，官公庁・会社・家庭などに出むいて，記入所要時間，質問の理解程度などを，観察しながら，記入してもらった。

調査票の回収率は，74.2%（配布数970，回収数720）であったが，回収した調査票のうち，12部は，未成年あるいは性別無記入などの条件不備で，無効と

した。

したがって，今回のアンケート調査は，成年（20才以上）男女708名についての調査である。その内訳は，別表のとおりである。

			調査地点				合計	出身地				
			東京	大田原	奈良	高松		京浜地区	北関東地区	関西地区	香川地区	その他・不明
年令	51才以上	男	17	27	12	8	64	12	23	7	4	18
		女	8	10	13	11	42	4	8	6	9	15
		全	25	37	25	19	106	16	31	13	13	33
	50才～41才	男	35	32	46	36	149	14	32	20	27	56
		女	36	36	35	32	139	17	26	17	20	59
		全	71	68	81	68	288	31	58	37	47	115
	40才～31才	男	11	24	27	12	74	4	25	7	9	29
		女	30	10	27	40	107	16	12	10	28	41
		全	41	34	54	52	181	20	37	17	37	70
	30才以下	男	17	10	12	5	44	6	10	6	3	19
		女	32	12	2	27	73	14	11	1	17	30
		全	49	22	14	32	117	20	21	7	20	49
	年令不明	男	1	0	2	1	4	0	0	0	0	4
		女	7	3	1	1	12	4	3	1	1	3
		全	8	3	3	2	16	4	3	1	1	7
合計		男	81	93	99	62	335	36	90	40	43	126
		女	113	71	78	111	373	55	60	35	75	148
		全	194	164	177	173	708	91	150	75	118	274

			職業						計
			農林漁業	サービス・商工品販売	一般事務・管理職	教育専門職	家事労働無職	その他不明	
学	大学卒	男	1	5	39	29	0	4	78
		女	0	0	1	6	1	2	10
		全	1	5	40	35	1	6	88
	新旧短大・高専	男	1	5	20	10	1	11	48
		女	0	0	6	20	19	19	64
		全	1	5	26	30	20	30	112

歴	新中高・高校・女旧	男	13	22	56	26	1	12	130
		女	15	26	20	13	136	31	241
		全	28	48	76	39	137	43	371
	義務教育	男	25	15	20	0	1	4	65
		女	6	11	3	1	21	5	47
		全	31	26	23	1	22	9	112
	不明	男	5	1	4	1	0	3	14
		女	2	1	0	0	4	4	11
		全	7	2	4	1	4	7	25
計		男	45	48	139	66	3	34	335
		女	23	38	30	40	181	61	373
		全	68	86	169	106	184	95	708

④ 小規模な実態調査

アンケート調査と，ほぼ並行して，東京以外の各調査地点においては，小規模な実態調査・聞きこみ調査などを実施した。この調査は，アンケート調査の調査結果の分析に必要と思われることがらを中心に，各調査地点での敬語表現の実態と敬語意識の問題点とを，つぎのような方法で調べたものである。

ア　録音による敬語表現の調査

各地点で数名ずつの被験者を依頼し，敬語表現を調べるのに好都合な場面での会話を録音し，敬語使用の実状を探り，合せてその録音に現われた特徴的な敬語表現について，被験者自身の意識を調査した。

イ　面接による敬語表現意識の調査

各地点で，年齢・性別・居住歴などの異なる数名の被験者を依頼し，各種場面における敬語・敬称の使用状況，および公共的な場面や商業上の接客の場面での敬語表現に対する意識・意見を聞くとともに，方言を含めて，その地域でよく使われる敬語表現全般にわたって，敬意の段階・使用場面などを調査した。

ウ　学校・職場における，敬語の教育上・習得上の問題点についての聞きこみ調査

学校教育での敬語の問題については，小・中・高校の教員を対象として聞きこみを行ない，職場における敬語については，商工会議所・官公庁・百貨

店あるいは，商店において，調査した。また奈良市・高松市においては，奈良学芸大学・香川大学学芸学部の教官を訪問し，敬語を含めて，市民のことばづかいや言語意識一般について意見・感想を聞いた。

以上のほか，特に大田原市については，無敬語地帯としての特殊性を重視して，昭和40年3月にさらに補正調査を行なった。

D 今後の予定

アンケート調査の集計は，昭和40年6月末までには，整理が終了し，それにもとづく分析の結果も，7月末までには，ほぼ出そろう見通しである。

（飯豊・田中）

現代語における漢字ならびに用字法に関する調査研究

A　調査の目的・意義

国語の正書法を確立するうえに役立つ基礎資料を得るために，国語の文字・表記法に関する諸問題を調査研究する。

B　担　当　者

調査研究の担当者は，

斎賀　秀夫　　土屋　信一（昭和39年9月1日就任）

の両名であり，研究補助員宇野瑠美子が作業に従事した。

C　これまでの作業経過

書きことば研究室で行なった「現代雑誌の用語用字の概観調査」で得られた資料に基づいて調査を進め，漢字の使用状況に関する報告書として，国研報告22『現代雑誌九十種の用語用字』（第二分冊　漢字表）を，昭和37年度に刊行した。引き続き，同じ資料に基づいて，漢字の音訓使用の実態と，表記のゆれに関する分析を進めてきたが，38年度は，斎賀・松本昭の両室員が「国民各層の言語生活の実態調査(B)」（→ 89 ページ）に委員として参加し，時間の大半をその仕事に費したため，多くはできなかった。ただ，漢字の音訓に関する分析結果の一部については，38年度の『年報15』に報告した。また，表記のゆれに関しては，38年度に送りがなの問題を採り上げ，標本に現われた語のうち，送りがなのつけ方がゆれている語，およびゆれる可能性のある語をすべてカード化し，内閣告示の「送りがなのつけ方」の通則番号に合わせてそれを分類し，「送りがな一覧表」を作成した。

D　本年度の作業と今後の予定

39年度は，室員の松本が書きことば研究室に配置がえになったほか，斎賀が「国民各層の言語生活の実態調査(B)」の幹事として，同調査の整理集計作業を担当したため，用字法に関する調査は一時停止せざるをえなかった。しかし，39年9月に土屋の就任を得て，再び，表記のゆれに関する調査に着手した。

まず，38年度に作成した「送りがな一覧表」を再検討し，それを訂正増補した。次いで，各語を品詞別，活用別，音節数別に分類し，送りがなについての問題点の分析にかかった。同時に，漢字・かなの使い分けに関する問題点を分析するため，必要なカードの採集・整理をはじめた。これらの分析は，40年度上半期までに，一応の結果をまとめる予定である。さらに，40年度下半期以降は，これらの分析結果によって明らかにされる表記上の問題点について，書き手・読み手を対象とする，表記調査を実施する予定である。

（斎　賀）

送りがなのゆれている語例（抜き書き）

——現代雑誌九十種の用語用字調査から——

現代雑誌九十種の用語用字調査における送りがなの実情について，その資料の一部を以下に掲げる。同調査における送りがなの実情については，現在，品詞や活用の種類，語の結合状況，語の音節数などとの関連において，分析を進めている段階である。その完了をまって，以上の分析結果を加えた「送りがな一覧表」をあらためて作成する予定である。

○　以下に掲げるのは，一つの語の中で送りがなのつけ方にゆれのある語例のうち，送りがなを伴なう用例の使用度数が20回以上あるものに限って，抜き書きしたものである。（送りがなにゆれの認められた語例は，全部で約600例余りあるが，ここに書きぬいたのは，そのうちの111例である。）

○　調査対象は，昭和31年1月号から12月号までの雑誌90種である。

○　以下の語例は，内閣告示「送りがなのつけ方」（昭和34年7月）の通則番号に従って分類し，各号の内部は，五十音順にならべた。ただし，第17項のただし書き(1)，および第19項のただし書きに掲げられた語にかぎっては，別に一項を設けず，それぞれ第17項，第19項の中におさめた。

○　用語用字調査における語の単位の長さは，内閣告示に示された語の単位よりも細か

く切れていることがある。したがって，特に，第17項と第19項に属する語例については，見出し語がさらに他の語と結合している用例を，その使用度数とともに（　）の中に注記しておいた。（　）の注記のないのは，その語がすべて単独に使われていたことを示す。

○　見出し語の漢字表記が数種にわたるものでも，同語と考えられるものは便宜上一括し，その代表的な漢字だけを見出しとして示した。

○　参考のため，かな書きの使用度数も併記した。それを示す略号は，次のとおりである。

ひ……全部ひらがな書きのもの　　カ……全部カタカナ書きのもの

ひカ……ひらがな・カタカナのまぜ書きのもの

① 「動詞は活用語尾を送る」に関するもの

於いて・於ける	17
於て	15
ひ	130

訪ねる	49
訪ずねる	1
ひ	20

訪れる	26
訪ずれる	2

伴う	28
伴なう	1
ひ	5

驚く	51
驚ろく	1
ひ	12

働く	78
働らく	5
ひ	7

下りる	28
下る	1
ひ	8

回る	26
回わる	1
ひ	18

返す	48
返えす	1
ひ	5

貰う	51
貰らう	2
ひ	98

帰る	203
帰える	1
ひ 15，カ	1

分る	107
分かる	2
ひ	173

決める	20
決る	1
ひ	25

①の例外　「ただし，次の語は，活用語尾の前の音節から送る」に関するもの

現われる	57
現れる	18
ひ	18

異る	13
異なる	9
ひ	1

3

行う	162
行なう	6
ひ	7

② 「活用しない部分に他の動詞の活用形またはそれに準ずるものを含む動詞は，含まれている動詞の送りがなによって送る」に関するもの

上る	30
上がる	8
ひ	28

起す	41
起こす	4
ひ	8

当る	56
当たる	1
ひ	32

起る	68
起こる	6
ひ	13

集まる	26
集る	19
ひ	4

終る	70
終わる	3
ひ 5，カ	1

合せる	40
合わせる	30
ひ	10

変る	107
替わる	1
ひ	23

生れる	59
生まれる	14
ひ	2

聞える	38
聞こえる	2
ひ	12

決る	18
決まる	8
◎	31

伸ばす	20
伸す	6
◎	17

暮す	16
暮らす	4
◎	4

始まる	33
始る	5
◎	30

加わる	19
加る	3
◎	1

減す	30
減らす	16
◎	1

過す	17
過ごす	4
◎	5

向う	52
向かう	4
◎	8

付ける	43
尾行る	2
◎	254

⑥ 「動詞と動詞が結びついた動詞は，それぞれの動詞の送りがなによって送る」に関するもの

受取る	6
受け取る	3
受けとる	11
うけ取る	1
◎	1

立上る	9
立ち上る	13
立ち上がる	2
立ちあがる	3
◎	1

落着く	17
落つく	2
落ちつく	9
◎	4

取上げる	6
取り上げる	4
取りあげる	4
とり上げる	8
◎	12

切開く	5
切り開く	20
きり開く	1

引上げる	13
引き上げる	6
引きあげる	4
◎	1

繰返す	7
繰り返す	7
くり返す	17
◎	10

⑦ 「形容詞は，活用語尾を送る。語幹が＜し＞で終わるものは，＜し＞から送る」に関するもの

新しい	108
新らしい	14
◎	3

短い	16
短かい	14
◎	1

忙しい	20
急がしい	2
◎	2

珍しい	22
珍らしい	18
◎	7

美しい	117
美くしい	1
◎	1

悪い	126
悪るい	1
◎ 21，㋕	1

⑦の例外 「ただし，次の語は，活用語尾の前の音節から送る」に関するもの

明るい	57
明かるい	2
◎	1

冷い	14
冷たい	20
◎	7

少い	57
少ない	45
◎	7

⑨ 「活用しない部分に動詞の活用形またはそれに準ずるものを含む形容詞は，その動詞の送りがなによって送る」に関するもの

恐しい	4
恐ろしい	23
◎	7

⑩ 「活用しない部分に形容動詞の語幹を含む形容詞は，その形容動詞の送りがなによって送る」に関するもの

暖い	8
暖かい	7
◎	11

柔い	4
柔かい	12
柔らかい	6
◎	11

細い	5
細かい	20
◎	11

⑬ 「活用語尾の前に「た」「か」「ら」「や

か」「らか」を含む形容動詞はその音節から送る」に関するもの

明か	13
明らか	28
明きらか	1
㋐	1

⑮ 「活用しない部分に動詞の活用形またはそれに準ずるものを含む形容動詞は，その動詞の送りがなによって送る」に関するもの

盛	3
盛ん	21
㋐	9

⑯ 「名詞は送りがなをつけない」に関するもの

形	105	為	22
形ち	1	為め	4
㋐	9	㋐ 474，㋕ 2	
位	92	隣	7
位い	3	隣り	18
㋐	218	㋐	2
先	100	皆	71
先き	6	皆な	1
㋐	23	㋐	112

⑯の例外 「ただし，次の語は，最後の音節を送る」に関するもの

互	13
互い	14
㋐	7

⑰ 「活用語から転じた感じの明らかな名詞は，その活用語の送りがなをつける」に関するもの

当	5（反～3，反～収量1，貫～1）
当り	36（1日～・坪～等27）
㋐	1
余	3（1割～等3）
余り	49（1年～等8）
㋐	137
入	4（寒の～1，一合～等3）
入り	31（南海～・映画～等19，銀糸～，干ぶどう～等7）
踊	3（かぶき～1）
踊り	17（東京～3，阿波～1）
㋐	2
思	1
思い	45（～通り1，奥様～1，社長～1）
答	33
答え	5
愉み	1
楽しみ	21（お～1）
㋐	2
問	26
問い	2
通	1
通り	105（二通り等17，思い～・従来～等31，昭和～等3）
㋐	48
匂	3
匂い	31
㋐	5
始	1
始め	38（減らし～1，編～1，～頃1，本年～2）
㋐	52
向	7（一般～・初心者～等5）
向き	24（奥様～・外出～等17）
㋐	3
向う	33（～意気1，レフト～1）
向こう	3
㋐	2

笑　60
笑い　7（お～2，愛想～1）

割　183（一～・五～等162，四つ～等2，～に2）
割り　1
ひ　5

⑰の例外(2)　「慣用が固定していると認められる次の語は，送りがなをつけなくてもよい」に関するもの

次　153（お～3，～の間1）
次ぎ　1
ひ　24

話　254（お～21，世間～・思い出～等10，～相手1，～上手1，～半分1）
話し　5（お話し1）
ひ　14

光　29
光り　2
ひ　1

⑲「活用語を含む複合名詞は，その活用語の送りがなによって送る」に関するもの

打合せ　36（～ずみ1，～する1，～分3，～中1，前～・後～等，作戦～1）
打合わせ　2（～する1）
打ち合わせ　2（～する1）

売上　39（～高23，～利益・～税等5，～増・～減少等4）
売上げ　10（総～1）

衿付　22（～止り9，前～等6，～寸法1）
衿付け　5（～どまり2）
衿つけ　4（～止まり2）

気持　101
気持ち　8
ひ　1

切替　12（～線8，袖～1）
切替え　23（～線15，～布1，～位置1，生産～1，機種～1）
切り替え　1

ゴム編　40（～アフガン1，～どめ4，変り～1，〔数〕目～29）
ゴム編み　1（機械～1）

間違　1
間違い　27（大～1）
間ちがい　2
ひ　8

見込　12（輸入～等3，実現～薄1，活用～先1，所得～額1）
見込み　12（後配～1）
ひ　1

利回　6
利回り　19（～〔数〕分2，〔数〕分～4，平均～等3，～採算2）

⑳「慣用が固定していると認められる次のような語は，原則として送りがなをつけない」に関するもの

物語　37（源氏～・花～等24，～人形1）
物語り　1
ひ　1

㉑「数をかぞえる＜つ＞を含む名詞は，その＜つ＞を送る」に関するもの

一　10
一つ　242（～家1，～こと2，～屋根1，～バス1）
一ツ　4
ひ　21

〔参　考〕

一　256
一と　4
一ト　9
一っ（箱）　1
ひ　18

一人　189
一人っ（子）　1
独り　10
ひ　43

㉒ 「代名詞は送りがなをつけない」に関するもの

誰	134
誰れ	10
ひ	47

我(吾)	24
我れ	3
ひ	17

何	560
何に	7
何っ	1
何ん	19
何ン	2
ひ 267，ひカ 2，カ 3	

㉓ 「副詞は最後の音節を送る」に関するもの

曾(嘗)て	4
曾(嘗)って	5
ひ	30

先	1
先ず	19
ひ	124

必ず	67
必らず	5
ひ	5

自ら(みずから)	26
自から	2
ひ	5

殆ど	8
殆んど	24
ひ 54，カ 1	

㉓の例外 「ただし，次の語は，その前の音節から送る」に関するもの

大に	1
大いに	49
ひ	2

㉖ 「活用語を含む副詞は，その活用語の送りがなによって送る」に関するもの

少く(と)も	19
少(尠)なく(と)も	7
ひ	2

〔参 考〕

1 連体詞

或	7
或る	33
ひ	125

我	6
吾が	22
ひ	101

2 接続詞

或は	15
或いは	9
ひ	67

及	3
及び	66
ひ	36

国民各層の言語生活の実態調査（A）

A　調査の目的・意義

この調査は，国民各層がどのような言語生活を営んでいるか，どのような問題をもち，どのような意識をもっているかを調べることを目的とするものであるが，このA班では，B班が話しことばに主眼をおいた調査を行なったのに対して，書きことば（文字言語生活）の実態と意識とを中心として調査した。

B　担　当　者

昭和37年度は，国立国語研究所全体の仕事として委員会組織で調査が進められた（『国立国語研究所年報15』参照）が，38年度および本年度は，次の３名の所員が共同で担当した。

永野　賢　　高橋太郎　　渡辺友左

C　これまでの作業経過

37年度には，二つの調査を実施した。その一は，ことばに関する全国的な大学生の意見調査であり，これについては，『年報 14』に成果が報告された。その二は，長岡市における市民の言語生活調査であり，その成果の一部は，38年度中に長岡市で行なわれた報告講演会で発表され，その時の配布資料が『年報51』に掲載されている。

38年度には，長岡における調査の継続調査として，東京を中心として調査を実施した。（『年報15』参照）

D　本年度の作業と今後の予定

本年度は，上記の長岡における調査と東京における調査との結果を合わせて，前記３名の担当者が共同で報告書を執筆した。これは，40年度中に，刊行される予定である。

（永　野）

国民各層の言語生活の実態調査（B）

A　調査の目的・意義

この調査は，国民各層がどのような言語生活を営んでいるか，どのような問題を持ち，どのような意識を持っているかを調べることを目的とするものである。昭和37年度は，A班が新潟県長岡市を選んで，市民の書きことば（文字言語生活）の実態と意識とを中心に調査したが，38年度は，B班が島根県松江市を選んで，いろいろの年齢・学歴・職業に属する市民を抽出し，話しことばに主眼をおいて，その言語生活の問題点と意識とを探ろうとした。

B　担　当　者

38年度は，国立国語研究所全体の仕事として，特別に委員会を組織し，8名の委員が調査の企画・運営にあたったが（『国立国語研究所年報15』参照），39年度は，委員会の幹事である斎賀秀夫が主として集計・整理の作業を担当し，研究補助員宇野瑠美子がこれを助けた。

C　これまでの作業経過

38年度に実施した調査は，大別して，

Ⅰ　言語生活の構造に関する調査

Ⅱ　場面による言語の変容と意識に関する調査

の二項目であり，これに従って，

(1)　基礎調査（とめおき調査）　(2)　市民調査（面接調査）

(3)　生徒調査（集会調査）　(4)　主婦調査（面接調査）

(5)　婦人学級調査（集合調査）　(6)　ＰＴＡ調査（集合調査）

(7)　24時間調査（録音・観察調査）　(8)　継続観察調査（録音・観察調査）

(9)　裏づけ調査（面接調査）

の各調査を実施した。（上記各調査の概要については『年報15』に報告した。）なお，上記各調査のうち，(3)　生徒調査，(4)　主婦調査，(5)　婦人学級調査，

(6) ＰＴＡ調査については，38年度じゅうに集計整理を完了した。

D 本年度の作業

39年度は，主として，(1) 基礎調査と，(2) 市民調査について集計整理作業を進め，１月末にほぼ完了することができた。ただし，(7) 24時間調査，(8) 継続観察調査，(9) 裏づけ調査については，その調査の担当者が所属研究室の仕事に時間をとられた関係で，分析をじゅうぶんに進めていない。

以上の調査の報告をかねた講演会を，２月20日に松江市で開催した。その概要については，庶務報告の中に示すとおりであるが（→110ページ），調査報告に関する発表は次のとおりである。

林　　大　「松江調査の概要」

林　四郎　「松江市民の言語生活」

斎賀　秀夫　「市民のことばの使い分け」

なお，この松江市における調査に関して，39年度じゅうに発表した論文は，次のとおりである。

渡辺友左「言語生活研究覚え書き」（国立国語研究所論集２『ことばの研究第２集』所収）

石綿敏雄「外来語の普及度――松江市での調査から――」（雑誌『言語生活』40年２月号所収）

南不二男「この人の敬語行動――松江二十四時間調査から――」（雑誌『言語生活』40年３月号所収）

E 今後の予定・見通し

以上の調査のうち，(1) 基礎調査と，(2) 市民調査を中心とした報告書を，40年度じゅうに作成する予定である。(3) 生徒調査に関しては，39年度に言語効果研究室が福島県福島市で，ほぼ同様の調査を実施し，松江市での結果と比較した報告が，別になされる予定である。なお，(7) 24時間調査，(8) 継続観察調査については，40年３月現在，文字化の作業がほぼ完了した段階なので，その分析は，今後に残されている。

（斎　賀）

国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り，あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために，前年度に引き続き，本年度も，昭和39年1月から12月までの刊行の図書・雑誌・新聞についての文献調査を行なった。これらの文献目録はその他の資料・情報とともに，当研究所編『国語年鑑』（昭和40年版）に掲載されている。

以下，その各々について分類し，冊数および点数により，大まかな傾向を示すことにする。

A 刊行書の調査

国語関係の刊行書について，書名・著(編)者名・発行所・発行年月・型・ページ数，ならびに内容を調べ，カード化し，総数360冊の分類目録を作成した。

刊行書の分類とその冊数

国語一般	7
国語史	11
音声・音韻	7
文字・表記	3
文法	6
文章・文体	5
翻訳	3
語彙・用語	16
人名・地名	10
方言・民俗	49
国語国字問題	13
国語教育	
国語教育一般	6
学習指導一般	16
聞く・話す	2
読む・読書指導	15
書く・作文指導	5
語彙・文字教育	7
文学教育	7
テスト	5
幼児教育	6
視聴覚教育	4
その他学習指導	8
言語技術	
話し方・聞き方	12
書き方	6

言語学その他	27
マス・コミュニケーション	13
広告	5
辞典・用語集	
国語辞典	5
用語辞典・用語集	26
特殊辞典	9
索引	4
資料	42
計	360 冊
追補	71

B 雑誌論文の調査

主として当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。採録した論文・記事の総数は 2,368 点に達した。

1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告書類の種別数

a 一般刊行雑誌（学会誌も含む）……197種

国語・国文・言語ほか	84	外国語	5
方言・民俗	10	総合誌	4
国語問題	8	詩歌・芸能	4
国語教育	36	その他（社会学・心理学ほか）	14
マス・コミ関係	14	本年度臨時にはいった雑誌	18

b 大学・研究所等の紀要・報告類……101種

なお，調査した刊行物は，主として研究所に寄贈された分（後記，「昭和39年度に寄贈された図書」の一覧（2）「逐次刊行物の部」参照）と，当所購入による下記の諸雑誌である。

計量国語学（計量国語学会）
国文学 解釈と鑑賞（至文堂）
文学（岩波書店）
国語と国文学（東大国語国文学会）
放送文化（日本放送協会）
国文学 言語と文芸（大修館書店）
文学・語学（三省堂）
英語青年（研究社）
教育（国土社）
教育心理（日本文化科学社）
児童心理（金子書房）
社会学評論（日本社会学会）
沖縄文化（沖縄文化協会）
学術月報（日本学術振興会）
作文と教育（百合出版）
日本文学（未来社）

2　論文・記事の分類とその点数

国　語（学）	
国語一般	75
意味	11
言語生活	20
言語活動	
言語活動一般	9
書く・読む	10
話す・聞く	31
国　語　史	
国語史一般	27
訓点と訓読語	15
音声・音韻	
音声・音韻一般	33
史的研究	11
アクセント・イントネーション	9
文　字	
文字・字体	7
用字	10
表記	23
語　彙	
語彙一般	12
古語	33
現代語	23
流行語・新語	9
外来語	3
名づけ	3
辞書・索引	33
文　法	
文法上の諸問題（現代語法）	54
文法の史的研究	87
敬語法	15
文章・文体	
文章・表現一般	84
史的研究	27
方　言	
方言一般	31
各地の方言	
東部	14
西部	20
九州・沖縄	13
古典の注釈	
古典注釈一般	4
奈良・平安	
万葉集	17
大和物語・伊勢物語	12
かげろふ日記	12
源氏物語・紫式部日記	22
枕草子	10
打聞集	2
その他	7
院政・鎌倉以後	
大鏡	12
梁塵秘抄	2
方丈記	8
問はず語り	14
芭蕉	10
その他	5
国語問題	
国語問題一般	52
表記法	
表記一般	11
当用漢字など	10
かなづかい	5

送りがな	1
わかち書き	1
横書き・縦書き	3
かな書き	9
地名・人名の表記など	2
国語教育	
国語教育一般	68
言語能力の発達	6
国語教育史	3
学習指導	
学習指導一般	75
板書	6
ことばの指導一般	63
聞く・話す	40
話しことば指導	25
聞く	15
話す	8
読む・書く	
読解指導	202
読書指導	16
作文教育	145
文字・表記指導	12
語彙教育	15
文法教育	21
文学教育	65
古典教育	4
漢文教育	4
学力評価	16
国語教科書・教材研究	62
特殊教育	14
ローマ字教育	1
日本語教育	6
言語学	
言語一般	22
比較研究	10
翻訳の問題	10
外国語研究	36
外国における日本語研究	3
外国語教育（学習）	21
外国における自国語教育	9
マス・コミュニケーション	
一般的問題	24
新聞	54
放送	
放送一般	68
ラジオ	11
テレビ	31
広告・宣伝	39
国語資料	29
書評・紹介	126
計	2,368 点
追補	52

C　新聞記事の調査

下記の諸新聞から，関係記事を切り抜き，それを整理し各月ごとに製本し，資料として保存し，閲覧に供するとともに，分類別のカード目録を作った。カードの記載形式は，見出し語（欄名だけで，見出し語のないものは，その内容によって，適宜題名をつけた。）・紙名・筆者名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。切り抜き総数1,897点である。調査した紙名，切り抜き点数お

よび月別の切り抜き点数は次のようである。

1　新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙	
朝日	376
（大阪その他）*	7
毎日	371
（大阪）	9
読売	225
（大阪）	4
東京	158
東京タイムズ（3月まで）	12
産経	174
（大阪）	10
日本経済	88
中部日本	139
西日本（4月から）	31
北海道（4月から）	102
読書	44
読書人	76
図書	31
新聞協会報	24
その他	16
計	1,897 点

*かっこの中は地方出版のもの。これは，大阪の山田房一氏，名古屋の平岡伴一氏などの地方在住のかたがたから，関係記事のあるごとに恵送されたもの。

2　月別の切り抜き点数

1月（159）	2月（138）	3月（207）	4月（176）
5月（181）	6月（153）	7月（129）	8月（129）
9月（154）	10月（167）	11月（171）	12月（133）

3　新聞記事の分類とその点数

国語（学）一般	106
ことばと機械	26
音声・音韻	25
文字	
文字・表記	8
活字	3
語彙	
語彙一般	11
各種用語	152
新語・流行語・隠語	69
外国語・外来語	83
辞書	18
問題語・命名	93
地名・人名	61
文法	4
文体	
文体・表現	27
翻訳の問題	38
方言	
方言一般	82
方言と標準語	13
各地の方言	21

言語生活	
言語生活一般	78
ことばの問題	55
ことばづかいの問題	48
敬語の問題	25
言語活動	
話しことば	53
読書	25
国語問題	
国語問題一般	99
表記の問題	
表記一般	14
当用漢字など	34
かなづかい	13
送りがな	2
かな書き	19
横書き・縦書き	9
地名・人名の表記	19
外来語表記	8
ローマ字	17
国語教育	
国語教育一般	13
学習指導の問題	
学習指導一般	9
話す（聞く）	3
読む（読書指導）	13
書く（作文指導）	8
学力テスト	33
文学・古典教育	10
特殊教育	19
視聴覚教育	4
ローマ字教育	4
幼児語教育	31
日本語教育	5
言語学	
言語一般	2
外国語一般	61
外国語教育	23
外国人の日本語学習	24
外国語に関する紹介他	20
マス・コミュニケーション	
マス・コミ一般	1
新聞	13
放送	46
宣伝・広告	14
出版	15
書評・紹介他	168
計	1,897 点

これら国語関係文献目録の詳細は，他の資料とともに，『国語年鑑』（昭和40年版）に掲載したので，ここではふれない。

D 担 当 者

この調査および国語年鑑編集の作業は主として次のものが担当した。

飯豊 毅一　　大久保 愛

なお，研究補助員塚田菊子・市橋孝子が作業を助けた。

（飯豊・大久保）

図書の収集と整理

前年度にひきつづき，研究所の研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集，整理，管理した。また，例年のとおり，各方面からの寄贈が少なくなかった。

昭和39年度に新しく加えた図書の数は，次のとおりである。

単行本	購入	601冊
	寄贈	232冊
雑誌	購入	390冊
	寄贈	783冊
新聞	購入	10種
	寄贈	2種

年度末における蔵書数（単行本だけ）は，29,410冊である。

（大　石）

昭和39年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名（敬称略）　　図　書　名

1　単行本　（　）内は編著者が寄贈者と異なる場合の編著者名。※は抜刷。

糸井　寛一　「九重町方言の動詞の語形表」※

伊藤　正雄　「近世日本文学管見」

今井　文男　「芭蕉新論」

入谷　敏男　「言語心理学」

楳垣　　実　「カルタ用語考」※「比較文型論の試み」※

大阪大学　「博士学位論文」5

大田栄太郎　「富山県方言集成資料目録稿」「富山県方言集成稿」1～6（富山市教育委員会）

大阪大学図書館　「図書目録」8

岡　　竹山　「漢字簡素化案」

奥村　三雄　「漢語アクセントの一性格」※「生ズルと称スル」※

皆藤きみ子　「歌集佛桑華」

香川大学図書館　「神原文庫分類目録」（風間書房）

学習研究社　「漢字学習小字典」（福島普徳）

勝俣　久作　「箱根仙石原村史略　(付)仙石のことば」

角川書店　「分類祭祀習俗語彙」（柳田国男）

神奈川県立金沢文庫　「金沢文庫古文書索引」

樺島　忠夫　「統計調査法入門」

京都学芸大学　「開学十五周年誌」

京都大学国文学会　「全一道人の研究」

京都大学人文科学研究所　「唐代の詩篇」1（平岡武夫），「家族法判例集成」（太田武男），「昭和36年度東洋学研究文献類目」

共　文　社　「教師の話術」（古田拡）

近畿方言学会　「丹後網野の方言」（井上正一）

金田一春彦　「四座講式の研究」

橘田　広国　「文字改革」

宮内庁書陵部　「桂宮本叢書」22・23，「伏見宮本琵琶譜」

グロータス　W・A「わたしは日本人になりたい」

慶応義塾大学言語文化研究所　「GOD AND MAN IN THE KORAN」（井筒俊彦），「柳田国男方言文庫目録」（西村亨）

研　究　社　「音声学」（今井邦彦）

剣持隼一郎　「粟島浦村の言語」※

講　談　社　「ママとべんきょう」（横地清）

国立国会図書館職員組合　「国立国会図書館のローマ字ヘボン化の問題について」1・2

近藤鏡二郎　「言語のリズム」

佐伯　功介　「ローマ字つずり方問題」※

佐藤　　亨　「岩手県北上市二子町方言の研究」

三　省　堂　「語勢沿革研究」（有坂秀世）

三　友　社　「ソビエトの外国語教育」（新英語教育研究会）

志津田藤四郎　「国語のきまり」

篠崎　書林　「英語学」Ⅱ（大阪英語学研究会），「英語音声学概論「（小栗敬三），「歴

史的に見た英国民の言語」(広岡英雄)

柴田　武　「生きている方言」

出版科学研究所　「盛り返してきた〝文庫本〟」1964年

主婦の友社　「主婦の友社の用字用語」

史　料　館　「史料目録」10

史料編纂所　「大日本史料」1—13，6—34，8—27，「大日本古文書　家わけ」19，「同　幕末外国関係文書」33，「大日本古記録　小右記」3，「同　言経卿記」4，「大日本近世史料　諸問屋再興調」5，「同　幕府書物方日記」1，「同　柳営補任」3・4，「日本関係海外史料目録」2・4，「花押かがみ」1

総理府統計局　「科学技術研究調査報告」

高羽　五郎　「訛語づくし」

高羽　四郎　「助動詞『る』の用法」

竹岡　正夫　「打聞集」訓釈※

竹原東小学校(岐阜県)　「読後感想文とその指導」

電　通　「広告概論」

天理図書館　「地球儀・天球儀」Ⅱ，「正岡子規」「AFRIKANA」Ⅱ

東京大学国語国文学会　「国語国文学研究文献目録　昭和38年度」

東京大学図書館　「継続受入雑誌所蔵目録　欧文編」1964年，「同　和文編」1964年

東京都教育庁　「東京都の教育　昭和39年度」

東洋文化研究所　「新収和漢図書目録」17・18，「アジア地域関係文献速報」14～19

徳島県立教育研究所　「プログラム学習の手びき」

富山大学図書館　「増加図書目録　昭和37，38年度」「雑誌目録　昭和37年12月末現在」

豊田　国夫　「言語政策論」※「民族と言語の問題」

奈良国立文化財研究所　「平城宮発掘調査出土木簡概報」2

西尾　実　「現場の言語生活」

日本学士院　「日本学士院八十年史」「同　資料編」1～4

日本芸術院　「日本芸術院史」

日本新聞協会　「新聞用語集　昭和39年版」

日本大学図書館　「根本目録」日本演劇資料総目録の三　「会田文庫分類目録」

日本放送協会　「全国方言資料」2，「スポーツ辞典14　柔道」，「同15　ウェイトリフテ

ィング」,「同16　射撃」,「同17　ボート・カヌー」,「同18　ヨット」,「同19　自転車・ホッケー・ハンドボール」,「同20　フェンシング・馬術・近代五種」,「同別冊　スポーツ競技の見どころ」「昭和39年6月テレビ・ラジオ番組聴視率調査」「気象用語集」「NHK用字用語辞典」

日本ユネスコ国内委員会　「国内ユネスコ関係団体名鑑」

日本ローマ字会　「国字論抜粋」（佐伯功介）

韮塚　知久　「北武蔵備前堀」（小内茂）

野地　潤家　「近代国語教育年表」Ⅱ，大正編

野宗　睦夫　「高校国語教育　――実践報告――」

白　楊　社　「サイバネティックスへの認識」（鎮目恭夫訳）

馬場　　宏　「能登木郎方言考」6

浜田　　敦　「慶長五年耶蘇会版倭漢朗詠集」

福岡市立教育研究所　「教育図書目録」追録，1962―7～1964―7

穂波出版社　「言語・文学・読解・作文・指導体系」（西原慶一編），「続・文法教育の実践」（西原慶一），「標準語・聞く話すことの教育」（西原慶一編），「小学校・中学校・高等学校の新しい指導計画と指導法」（西原慶一編），「新しい国語学習指導案とその展開」（西原慶一編），「新しい国語学習指導法の開拓」（西原慶一編），「低学年の表現指導」（西原慶一編），「中学校の文法教育」（西原栄穂），「学力をのばすノートの使い方」小学校編（佐々木賞），「思考力を育てる作文指導の系統的実践（杉山愛子），「わたしの作文指導」（馬屋原忠夫），「入門期の言語指導」（長沢昭治），「生きる力の作文学級」（豊島佳子），「新しい国語教壇」（稲川三郎），「イギリスの教育」（岡島繁），「国語プログラム学習の方法」（宮川利三郎），「学習指導の基礎技術」（東京教育大学附属中学校教育技術研究会）

松本　克巳　「言語の働きの二つの相」※

盛岡市教育研究所　「小学校国語科研究集録」

文　部　省　「日本語教育のあり方」「学制九十年史」「全国学力調査報告書　社会科・理科　昭和32年度」「同　社会科・理科　昭和33年度」「同　社会科・理科　昭和35年度」「同　国語・数学　昭和34年度」「全国小学校学力調査報告書　国語・算数　昭和36年度」「全国中学校学力調査報告書　昭和36年度」「全国高等学校学力調査報告書　英語　昭和36年度」「同　数学，

1　昭和37年度」「全国中学校学力調査中間報告書　昭和38年度」「全国小学校学力調査中間報告書　昭和38年度」「幼児の生活に及ぼすテレビジョンの影響報告書　昭和36・37年度」「全国小学校学力調査報告書　昭和37年度」「全国中学校学力調査報告書　昭和37年度」「国語審議会報告書6」「わが国の高等教育(教育白書)」「学術雑誌総合目録―人文科学　欧文編―」「国語シリーズ58　児童・生徒の語い力の調査，本調査（昭和35年度)」「同59　児童・生徒の語い力の調査　低学年の学習語（昭和37年度)」「同60　慣用語句とその教育上の問題」「同61　方言の見方・考え方」「同62　日本語と英語」「わが国の教育水準　昭和39年度」「作文の学習指導」

矢野　文博　「日本語の品詞分類」※

山口大学図書館　「欧文雑誌目録」1962年12月末現在

ユネスコ東アジア文化研究センター　「THE　VOCABULARY OF JAPANESE LITERARY AESTHETICS」(HISAMATSU SEN'ICHI)

吉野　忠　『ニシテ』から『デ』へ※

2　逐次刊行物（おもなもの）

愛知県立女子大学　「説林」13，「紀要」15

朝日放送ＫＫ　「放送朝日」128～130

明日香社　「明日香」299～310

いずみ会　「ＩＺＵＭＩ」61・62

愛媛大学　「愛媛国文研究」14，「紀要」9

大分大学学芸学部　「研究紀要」2―4（Ａ・Ｂ・自然）

大阪学芸大学　「紀要」A12・Ｃ5，「学大国文」7・8

大阪市立大学　「人文研究」15―2～11，16―1

大下学園　「研究紀要」6・7

大谷大学　「大谷学報」42―3・4，43―1～3，「研究年報」15

お茶の水女子大学　「国文」21・22，「人文科学紀要」17

学燈社　「国文学」9―6～15，10―1～5

鹿児島大学　「薩摩路」9，「文科報告」13

金沢大学　「教育学部紀要」8～12

カナモジカイ　「カナノヒカリ」502〜513，「モジトコトバ」253〜262

関西学院大学　「人文論究」14—2，15—1・2，「日本文芸研究」15—4，16—1・2

関西大学　「国文学」34〜37

九州大学　「語文研究」17・18

京都学芸大学　「紀要」A23〜25，B23〜25

京都女子大学　「女子大国文」33〜36

京都大学　「音声科学研究」3，「教育学部紀要」10，「文学部研究紀要」8，「人文科学研究所紀要」36〜40，「心理学評論」7—1，「ZINBUN」7

京都大学国文学会　「国語国文」352〜355，357，359，365〜367

金城学院大学　「論集」25，「金城国文」30

熊本大学　「教育学部紀要」12—1・2

訓点語学会　「訓点語と訓点資料」28・29

群馬大学　「紀要」12・13

高知大学　「国語教育」12，「学術研究報告」13—6，13

甲南女子大学　「甲南国文」11・12

神戸市外国語大学研究所　「研究年報」1，「神戸外大論叢」71〜75

神戸女子学院大学　「論集」31〜33

神戸大学　「教育学部研究集録」31〜32

語学教育研究所　「語学教育」268〜272

国学院大学　「国語研究」18・19，「国学院雑誌」65—4〜12，66—1，「紀要」4・5

国語学会　「国語学」56〜59

国語問題協議会　「国語国字」21〜26

国語を愛する会　「日本語」26〜33

国立教育研究所　「紀要」41〜44

「古典と現代」の会「古典と現代」20・21

埼玉県立教育研究所　「研究紀要」54〜60

滋賀県教育研究所　「研究紀要」6—1〜6

滋賀県高等学校国語教育研究会「会誌」37〜39

滋賀大学「学芸学部紀要」13・14，「滋賀大国文」1

静岡県立教育研修所　「教育研究」25〜27

静 岡 大 学　「教育学部研究報告」14，「静大論集　西部篇」2

実践国語研究所　「実践国語」290〜302

信濃教育会　「信濃教育」929〜940，「国語の教室」7〜10

島 根 大 学　「山陰文化研究所紀要」5，「論集」13・14

小　学　館　「総合教育技術」19—2〜14，「教育技術学習心理」5—2〜6

上 智 大 学　「ソフィア」13—1〜4

昭和女子大学光葉会　「学苑」292〜303

信 州 大 学　「文理学部紀要」13，「教育学部紀要」13，「教育学部研究論集」15

成 城 大 学　「成城文芸」35〜37，「傳承文化」4

聖心女子大学　「論叢」22・23

全日本CM協議会　「A・C・C・CM研究」16・17

大　修　館　「英語教育」13—2〜12，14—1，「国語教室」117〜119

大東文化大学　「東洋研究」10，「紀要」(文学部) 2

秩父市教育研究所　「教育研究」20〜22

天 理 大 学　「学報」(人文) 43〜46，(自然) 2，「ビブリア」27〜29，「文化」42・43

東京教育大学　「国文学　言語と文芸」33〜37，「言語学論叢」5，「社会科学論集」11，「文学部紀要」47，「教育学部紀要」10

東京教育大学初等教育研究会　「教育研究」19—4〜12，20—1〜4

東京女子大学　「比較文化研究所紀要」17・18，「比較文化」11

東 京 大 学　「人文科学科紀要」32，「新聞研究所紀要」12，「教育学部紀要」6，「東洋文化研究所紀要」32〜34

東京都立大学　「人文学報」36〜42，「都大論究」4

統計数理研究所　「数研研究リポート」10〜12，「彙報」21，「統計研究通信」7

同志社大学　「人文学」70，「文化学年報」13

東大国語研究室　「国語研究室」3，別冊2

東 北 大 学　「国語学研究」4，「文芸研究」44〜49，「文学部研究年報」14，「東北文化研究室紀要」6

東 洋 大 学　「王朝文学」11，「文学論藻」25〜29

徳島県教育委員会　「教育月報」171〜181

中沢　政雄　「国語教育科学」（国語教育科学研究会）39～50

仲田　庸幸　「国語研究」（愛媛国語研究会）46・47

名古屋大学　「教育学部紀要」11，「文学部研究論集」12，「国語国文学」14・15，「教養部紀要」8

日本英文学会　「英文学研究」40―1・2，41―1，（英文号）1964，1965

日本エスペラント学会　「エスペラント」32―11・12，33―2・3

日本音声学会　「音声学会会報」116

日本学士院　「紀要」21―2・3，22―1

日本言語学会　「言語研究」45・46

日本大学　「人文科学研究所研究紀要」5・6，「文理学部研究年報（三島）」13，「語文」18～20

日本のローマ字社　「RÔMAZI NO NIPPON」139～148

日本文学研究会　「文学研究」19・20

日本放送協会放送文化研究所　「年報」9，「放送学研究」9，「文研月報」155～166

日本民間放送連盟放送研究所　「放研ハンドブック」2，「放研資料」16，「放研レポート」1～6，8～10

日本民俗学会　「会報」33～37

日本民族学協会　「民族学研究」28―1・2，29―1・2

日本ローマ字会　「ローマ字世界」563～570

日本ローマ字教育協議会　「ことばの教育」135～138

広島大学　「中世文芸」29・30，「文学部紀要」23―1～3，「教育学部紀要」13，「国語教育研究」9，「国文学攷」33～35

福岡市立教育研究所　「研究所報」48～52

藤原　与一　「方言研究年報」7

文化放送　「ラジオコマーシャル」15～18

米国大使館文化交換局　「日米フォーラム」10―4～11，11―1～3

方言研究同好会　「土佐方言」5・7・8

放送批評懇談会　「放送批評」15～21，23・24

北海道学芸大学　「学術文献収報」31～35，「語学文学会紀要」1・2，「人文論究」24，「紀要」14―2（A・B・C）

北海道教育研究所　「研究紀要」41～43

北海道大学　「教育学部紀要」10，「国語国文研究」27～29

萬葉学会　「萬葉」51～54

水門の会　「水門」4～6

宮城学院女子大学　「研究論文集」24・25

武蔵野甲南文学会　「試論」8～10

明治図書出版KK　「児言研国語」1～3，「教育科学国語教育」66～77

文部省　「教育統計」88～92，「指定統計」13・15・83，「初等教育資料」161～177，「年報」90，「文部統計速報」104～106

山形県教育研究所　「山形教育」103～105，107・108

山形大学　「紀要」(人文)5－3・4，(社会)2－1・2

山口大学　「文学会志」15－1・2，「教育学部研究論叢」13－1・3

立教大学　「日本文学」12・13

立正大学　「文学部論叢」19・20，「国語国文」1・2・4

立命館大学　「立命館文学」221～231

竜谷大学　「論集」276～277

ローマ字評論社　「RÔMAZI HYÔRON」2～4

早稲田大学　「国文学研究」29・30，「学術研究」13，「史観」69・70，「平安朝文学研究」10

UNIVERSITY OF LONDON

"BULLETIN OF THE SCHOOL OF ORIENTAL AND AFRICAN STUDIES" 27－1～3

CENTRE INTERNATIONAL DE DIALECTOLOGIE GENERALE

"ORBIS" 12－2，13－1

庶　務　報　告

A　庁舎および経費

1　庁　舎

所　在	東京都北区稲付西山町	
敷　地		10,247.84m²
建　物		
本　館（延）鉄筋コンクリート二階建		1,694.64m²
付属建物（延）		1,720.94m²
図書館新営　鉄筋コンクリート，平家建，書庫積層(3)		213.84m²
	計	3,629,42m²

2　経　費

昭和39年度予算総額		65,579,000円
	人件費	53,153,000円
	事業費	12,426,000円
昭和39年度文部省科学研究費	総合研究	500,000円
	各個研究	200,000円
昭和39年度施設設備費（図書館新営）		9,405,000円
昭和39年度各所修繕費		2,570,000円

B　評　議　員　会

会長　久松　潜一　　副会長　有光　次郎

△阿部真之助　　阿部　吉雄　　石井　良助

伊藤忠兵衛　　桂　　寿一　　高津　春繁

佐伯　梅友　　佐々木八郎　　沢田　慶輔

中島　文雄　　中村　光夫　　永井　健三

西尾　　実　　西脇順三郎　　細田　菊雄

○ 前田　義徳　　武藤俊之助　　山本　勇造

横田　　実

○　前田評議員は39年10月1日就任。

△　阿部評議員は39年7月9日死去。

C　組織と職員

1　定　員　　教官　33　事務官　14　その他　24　計　71

2　組織および職員

	職　名	氏　名	備　　考
国立国語研究所	所　長	岩淵悦太郎	
第1研究部	部　長	林　　大	
話しことば研究室	室　長	大石初太郎	
		宮地　　裕	
		鈴木　重幸	
		吉村　香苗	
		衛藤　蓉子	39.4.1採用
書きことば研究室	室　長	見坊　豪紀	
		西尾　寅弥	
		石綿　敏雄	
		宮島　達夫	
		南　不二男	
		松本　　昭	
		橋本　圭子	
		高木　　翠	
		小林さち子	
		本多レイ子	
地方言語研究室	室　長	柴田　　武	39.9.1東京外国語大学に配置換え
		林　　大	39.9.1地方言語研究室長事務取扱を命ずる
		野元　菊雄	38.9.19英国へ出張
		上村　幸雄	

		徳川　宗賢	
		白沢　宏枝	
第2研究部	部　　長	興水　　実	
国語教育研究室	室　　長	芦沢　　節	
		村石　昭三	
		根本今朝男	
		川又瑠璃子	
		福田　昭子	39.4.1採用
言語効果研究室	室　　長	林　　四郎	
		高橋　太郎	
		渡辺　友左	
		屋久　茂子	
第3研究部	部　　長	山田　　巌	
近代語研究室	室　　長	永野　　賢	
		進藤　咲子	
		中曽根　仁	
		長尾　紀子	39.5.15辞職
		牧野　正子	39.6.1採用
古代語研究室開設準備室	主任(併)	山田　　巌	
		広浜　文雄	主任研究官
第4研究部	部　　長	松尾　　拾	39.4.1第4研究部長に昇任させる 40.3.31辞職
		岩淵悦太郎	39.4.1第4研究部長の併任を免ずる
第1資料研究室	室長(併)	松尾　　拾	第1資料研究室長に併任する
		田中　章夫	
		露峰　裕子	
		河東はるみ	
第2資料研究室	室　　長	飯豊　毅一	
		大久保　愛	
		高田　正治	
		塚田　菊子	
		市橋　孝子	旧姓小山

第3資料研究室	室　長	斎賀　秀夫	
		土屋　信一	39.9.1採用
		宇野瑠美子	
庶務部	部　長	尾崎源之助	
庶務課	課　長	三島　良兼	
	課長補佐	名古屋　恒太郎	
		鈴木　篁二	
		西山　博	
		根岸佐代子	
		斎藤　恭子	
会計課	課　長	出牛清次郎	
	課長補佐	伊藤　仲二	
		三浦　清伍	
		渋谷　正則	
		鈴木　亨	
		筒井　士郎	
		岡本　まち	
		金田　とよ	
		加藤　雅子	
		中村　佐仲	
		安藤信太郎	
		船倉　正章	
図書室	室長(併)	大石初太郎	
	(併)	鈴木　篁二	
		芳賀清一郎	
		大塚　通子	

D　研究成果の公表

昭和38年度に島根県松江市で行なった「国民各層の言語生活の実態調査(B)」の報告をかねて，同市で講演会を開催した。その概要は次の通りである。

国立国語研究所講演会「松江市民のことば」

○主催：国立国語研究所・松江市教育委員会

○後援：島根大学・島根県教育委員会・ＮＨＫ松江放送局・島根新聞社

○日時：昭和40年２月20日(土)　午後１時30分～５時

○会場：松江市役所集会室

○参集者：約200名（一般市民，教育関係者など）

○講演

1	開会のあいさつ	松江市収入役	漢東種一郎
2	松江調査の概要	国立国語研究所第１研究部長	林　　大
3	松江市民の言語生活	国立国語研究所員	林　四郎
4	市民のことばの使い分け	〃	斎賀　秀夫
5	出雲方言と中国地方方言	島根大学教授 国立国語研究所地方研究員	広戸　惇
6	方言と標準語	国立国語研究所長	岩淵悦太郎
7	閉会のあいさつ	松江市教育研究所長	笹岡　昌雄

E　内地留学生受け入れ

全国都道府県から内地留学生を受け入れて，研究の便をはかった。次にその氏名研究題目などを掲げる。

氏　名	学　　校	研究題目	研究期間
深谷　仲夫	埼玉県比企郡川島村立川島中学校教諭	読解指導と文章論	昭和39. 4. 1から 〃　40. 3.31まで
剱持　昭典	山口県防府市立華浦小学校教諭	国語科指導における理解と表現の関連について	昭和39. 5. 1から 〃　39. 7.31まで
和田　　孜	愛知県名古屋市立菊住小学校教諭	ことばの機能に即して鑑賞体験を深める手段について	昭和39. 5.26から 〃　39. 7.14まで
池田　冨男	長崎県島原市立第二小学校教諭	読解指導について	昭和39. 7.24から 〃　39. 8. 8まで
伊福　芳樹	長崎県南高来郡有家町立有家小学校教諭	読解指導と語法指導について	昭和39. 7.24から 〃　39. 8. 8まで
中村　輝男	長崎県西彼杵郡大島町立大島第三小学校教諭	読解指導について	昭和39. 7.24から 〃　39. 8. 8まで

深見　研悟	長崎県松浦市立調川中学校教諭	中学校における作文指導	昭和39. 7.24から 〃　39. 8. 8まで
松本　真喜	長崎県佐世保市立天神小学校教諭	話すことと書くことの関連性について	昭和39. 7.24から 〃　39. 8. 8まで
山田　米実	長崎県西彼杵郡三和町立三和中学校教諭	読解指導について	昭和39. 8.12から 〃　39. 8.15まで
山口　義信	長崎県長崎市立式見小学校教諭	主体的な読み手を育てるための読解指導について	昭和39. 8.20から 〃　39. 9. 3まで
上田　　正	富山県黒部市立白鷹中学校教諭	文章論的読解指導の研究	昭和39. 9. 1から 〃　39.10.10まで
今泉　敬一	長崎県佐世保市立大野小学校教諭	文章理解能力の発達段階とその効果的指導法について	昭和39.10.22から 〃　39.11. 2まで
小沼　　久	茨城県教育庁指導課指導主事	小・中学校における国語指導の諸問題	昭和40. 1. 5から 〃　40. 3.21まで

F　日　　誌　　抄

1964. 4. 8　東海大学教授梁容若外1名研究所見学

4. 16　各省直轄研究所長連絡協議会総会（都道府県会館で）

5. 14～15　第15回文部省所轄機関事務協議会（京都国立博物館で）

5. 15～16　関東甲信越地区各国立大学・所轄機関庶務部課長会議（お茶の水女子大学で）

5. 18～19　国立学校および所轄機関等庶務部課長会議（文部省で）

5. 27～28　第23回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（日本学術会議で）

5. 28　文部省所轄研究所長会議（迎賓酒家で）

6. 2　国際キリスト教大学教授 N. Ege 研究所見学

6. 22　台湾省立師範大学講師鍾露昇研究所見学

〃 〃　東京大学大学院人文科学研究科楊福綿研究所見学

7. 14　韓国서울大学校副教授李應百研究所見学

7. 28　第55回国立国語研究所評議員会

議事

1　会長の選出

2　研究事業の中間報告

3　昭和40年度の予算要求

8. 26　大蔵省小田村主計官・宮下主計官補佐・文部省内山国語課長・望月課長補佐研究所視察

9. 24　各省直轄研究所長連絡協議会総会（全国町村会館で）

10. 1～2　第17回文部省所管研究所事務協議会（京都大学で）

10. 21　文部省任用監査

監査官　舟橋係長　　森山事務官　　磯野事務官

10. 19　二松学舎大学助教授浮田章一外45名研究所見学

10. 19～20　文部省所轄研究所長会議（奈良東大寺で）

12. 3～4　文部省所轄ならびに国立学校附置研究所長会議第3部会（九州大学で）

12. 14　ペルー国立大学言語学および諸外国語学部長エルネスト・ツィラー外1名研究所見学

12. 15　第56回国立国語研究所評議員会

議事

1　研究事業の中間報告

2　その他

12. 19　創立記念日の記念講演　講師　石井評議員（研究所会議室で）

12. 20　国立国語研究所創立記念日

1965. 2. 12　群馬県邑楽郡小学校国語主任会部長長沢高男外10名研究所見学

2. 15　埼玉県熊谷市小学校国語主任会部長新井松三外6名研究所見学

2. 20　国立国語研究所講演会「松江市民のことば」（松江市役所集会室で）

2. 23～24　第15回文部省所管研究所第3部会事務協議会（京都市楽友会館で）

2. 24　東北大学教授大泉充郎外1名研究所見学

2. 25　福島県立女子高等学校教諭加藤京子外1名研究所見学

3. 1　大阪府立大手前高等学校教諭藤川千秋研究所見学

3. 4　第57回国立国語研究所評議員会

議事

1　副会長の選出

2　昭和39年度の研究報告

3　昭和40年度予算の内示について

4　昭和40年度の研究課題について

5　その他

3．12　　人事院給与簿監査

監査官　荻原課長補佐　河村事務官　　西村事務官

西垣事務官　　文部省加藤係長

3．26　　各省直轄研究所長連絡協議会総会（気象庁で）

昭和40年11月

国立国語研究所

東京都北区稲付西山町
電話東京(900) 3111(代表)

UDC　413=956
NDC　814.5

2

国立国語研究所刊行書

国立国語研究所年報

1〜15　（昭和24年度〜昭和38年度）

国立国語研究所報告

1　八丈島の言語調査
2　言語生活の実態（秀英出版刊 ¥300.00）
　—白河市および付近の農村における—
3　現代語の助詞・助動詞
　—用法と実例—
4　婦人雑誌の用語
　—現代語の語彙調査—
5　地域社会の言語生活（秀英出版刊 ¥600.00）
　—鶴岡における実態調査—
6　少年と新聞
　—小学生・中学生の新聞への接近と理解—
7　入門期の言語能力
8　談話語の実態
9　読みの実験的研究
　—音読にあらわれた読みあやまりの分析—
10　低学年の読み書き能力
11　敬語と敬語意識
12　総合雑誌の用語（前編）
　—現代語の語彙調査—
13　総合雑誌の用語（後編）
　—現代語の語彙調査—
14　中学年の読み書き能力
15　明治初期の新聞の用語
16　日本方言の記述的研究（明治書院刊 ¥900.00）
17　高学年の読み書き能力
18　話しことばの文型（1）
　—対話資料による研究—
19　総合雑誌の用字
20　同音語の研究
21　現代雑誌九十種の用語用字
　—総記および語彙表—
22　現代雑誌九十種の用語用字
　—漢字表—
23　話しことばの文型（2）
24　横組みの字形に関する研究
25　現代雑誌九十種の用語用字
　—分析—
26　小学生の言語能力の発達（明治図書刊 ¥2,100.00）
27　共通語化の過程
28　類義語の研究

国立国語研究所資料集

1　国語関係刊行書目（昭和17～24年）
2　語彙調査
　　—現代新聞用語の一例—
3　送り仮名法資料集
4　明治以降国語関係刊行書目（秀英出版刊 ¥300.00）
5　沖縄語辞典（大蔵省印刷局刊 ¥2,500.00）
6　分類語彙表（秀英出版刊 ¥900.00）

国立国語研究所論集

1　ことばの研究
2　ことばの研究第2集

国語年鑑

（昭和29年版）（秀英出版刊 ¥450.00）
（昭和30年版）（秀英出版刊 ¥600.00）
（昭和31年版）（秀英出版刊 ¥450.00）
（昭和32年版）（秀英出版刊 ¥480.00）
（昭和33年版）（秀英出版刊 ¥480.00）
（昭和34年版）（秀英出版刊 ¥500.00）
（昭和35年版）（秀英出版刊 ¥550.00）
（昭和36年版）（秀英出版刊 ¥800.00）
（昭和37年版）（秀英出版刊 ¥500.00）
（昭和38年版）（秀英出版刊 ¥950.00）
（昭和39年版）（秀英出版刊 ¥980.00）
（昭和40年版）（秀英出版刊 ¥1,100.00）

高校生と新聞　国立国語研究所・日本新聞協会共著（秀英出版刊 ¥280.00）
青年とマスコミュニケーション　日本新聞協会・国立国語研究所共著（金沢書店刊 ¥280.00）

1964—1965

ANNUAL REPORT OF NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword
Outline of Researches from April 1964 to March 1965
Study of Colloquial Japanese-grammar
Study on Meaning and Use of Verbs and Adjectives
Preparation for the Statistic Investigation of Vocabulary by Erectronic Data Processing Equipment
Survey for Linguistic Atlas of Japan
Contrastive Study of the Dialects and the Common Language
Study on Language Development of Junior High School Pupils
Study on Influence of Situation on Sentence pattern
Survey on Communication Consciousness of Boys and Girls
Study on Language of Meizi Period
Preliminary Survey on Polite Expression
Study on Use of Chinese Characters and Writing System of Modern Japanese
Social Survey on Linguistic Life
Others
General affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
INATUKE-NISIYAMA, KITA, TOKYO